

097942-000-7

特11-77

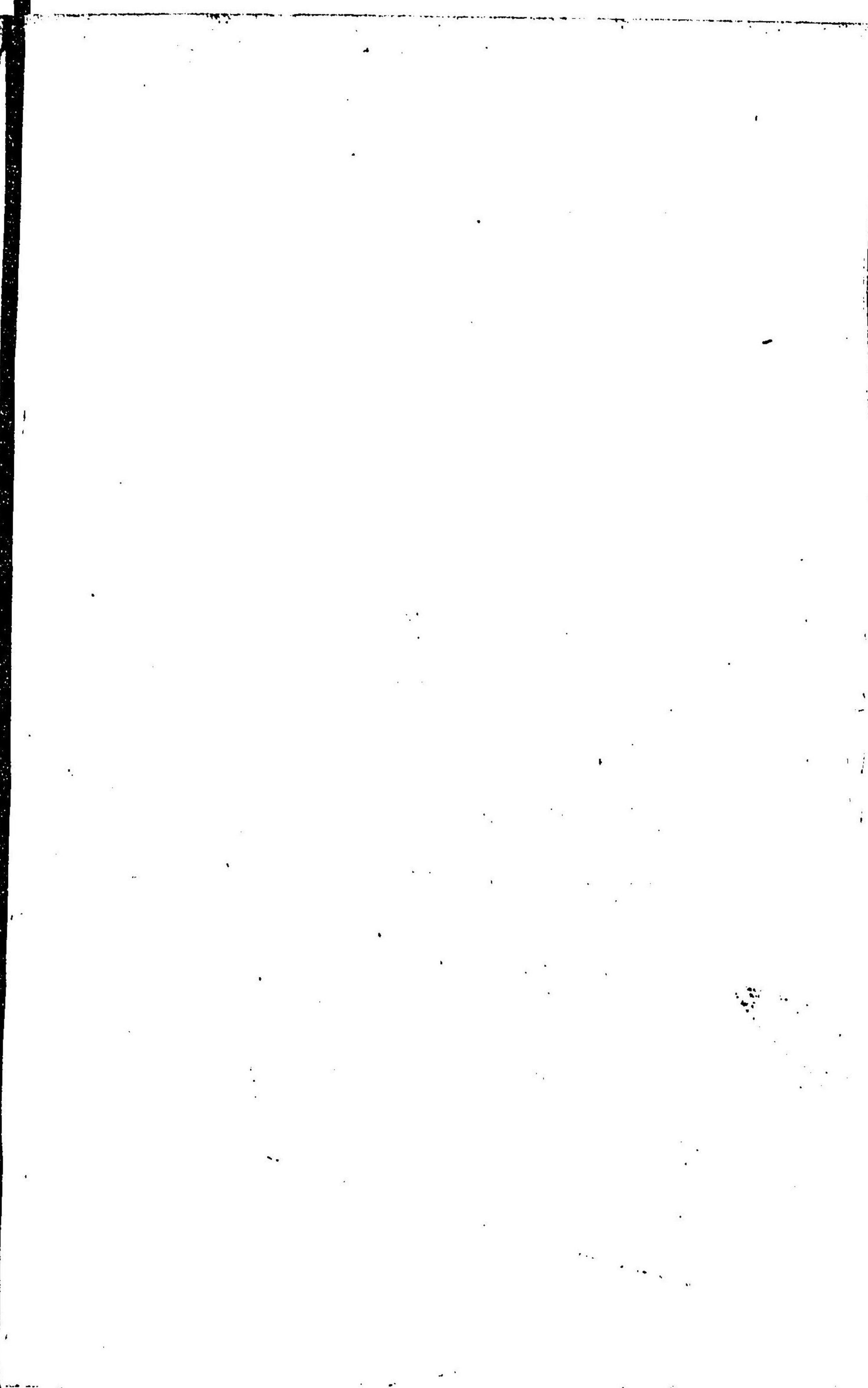
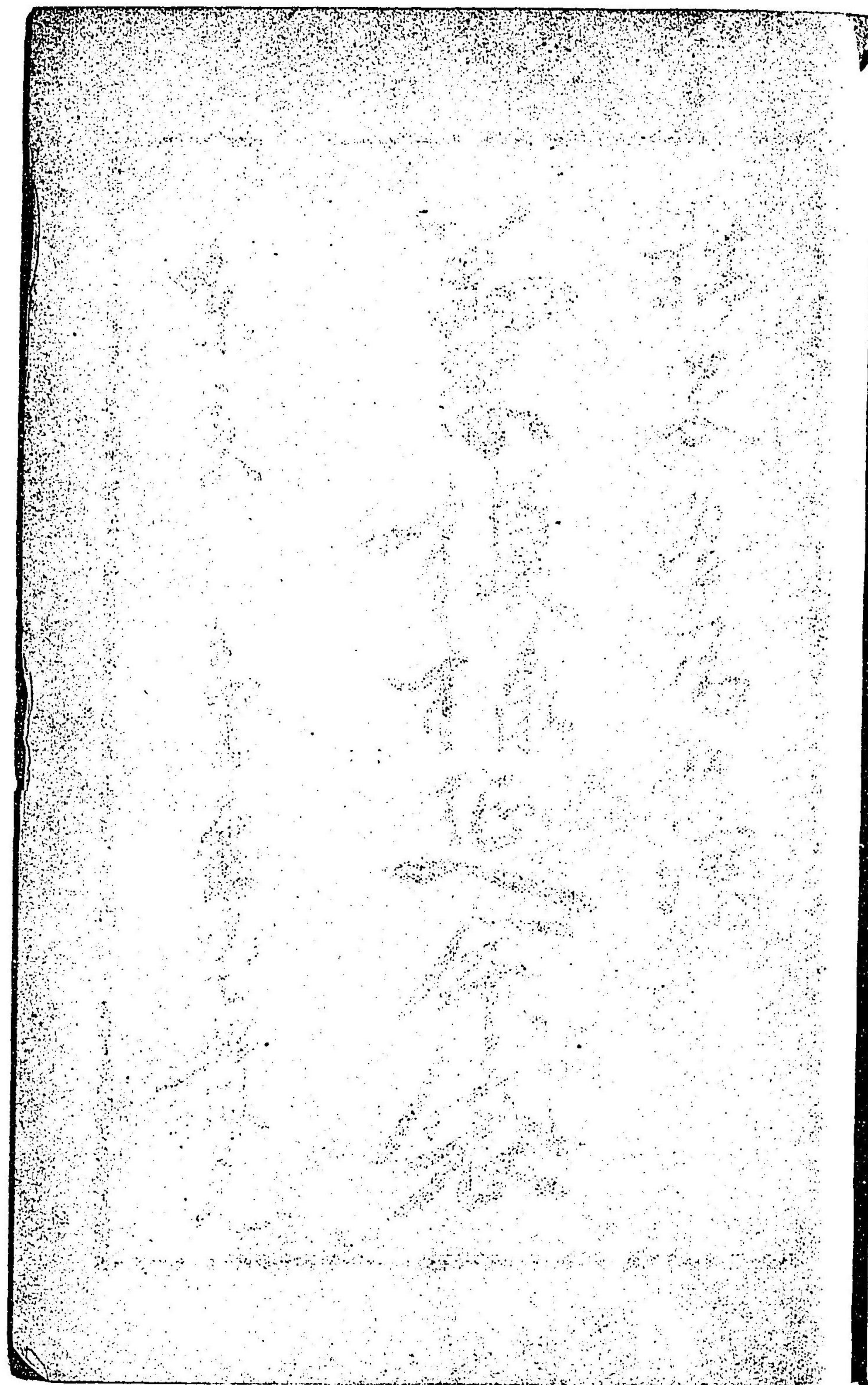
菊模様延命袋

橘家 円喬/口演

M25

DBT-0120





楷法急為口深

篆模隸正余容

東京

金吉堂書畫

序

彼の偉人傑士より兇漢暴夫に至るまで其行爲の稱揚
すべきと唾棄すべきと乃至其人情の粹美を穿ち人を
して知らざ識らざ切齒扼腕せしめ泣涕禁せしむ能と
さらしむるの技を逞ふるものに至ては余常に之れ
と落語家に歸し近者書肆金松堂主人一書を手にして
來り序を需む余即ち之れを閲するに彼の落語の技に
於て入品の手と稱せらるゝ圓喬子の嬌々たる口端よ
り溢出せる話柄を酒井昇造氏が速記せる延命袋なり
因つて以爲らく此編の人口に繪炙せるや久し而して

其人情の粹美を悉くせるとも亦至れり故に圓喬子の
之れを口にし之れを述ぶるに當てや蓋し幾多の人士
をして怒らしめ悲ましめ笑はしめ而して樂ましめた
る必ぞや少々あらざるべし今金松堂主人の此書を發
行せらるゝに於て彼の未だ圓喬子を知らざるものと
して耳之れを聽き目之れを視るの感を生ぜしめ時に
或は切齒扼腕泣涕禁ざる能はざらざるものそれ幾
何ぞや若し其れ此編結構の巧拙如何は之れを讀者の
炯眼に讓らん

明治壬辰臘月

鷗 游 漁 史



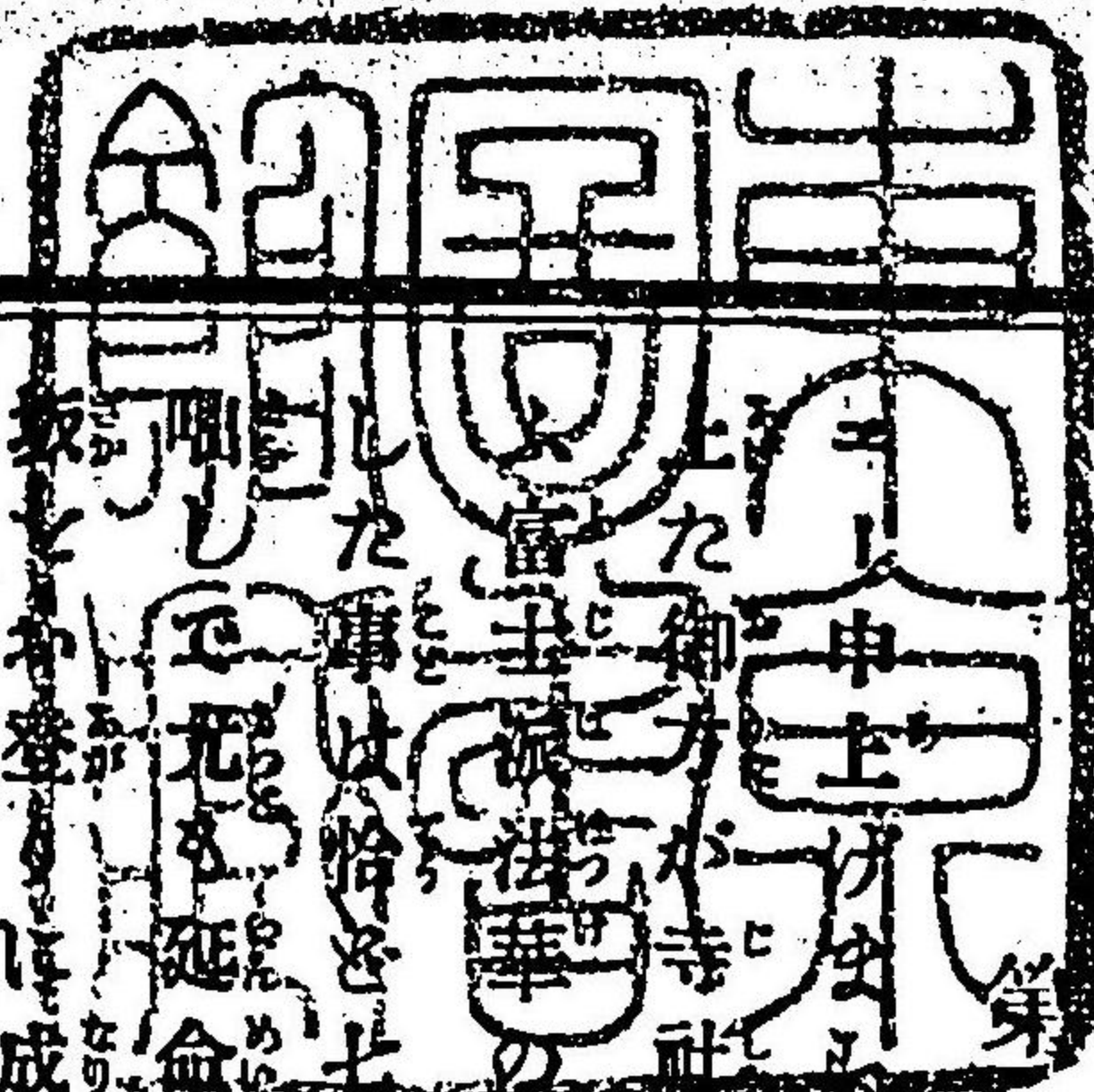
拾一
77

菊摸様延命袋

一席



橘家圓喬口演
酒井昇造速記



申上り申すに、延命院の敷地は只今以て皿地小成て居ます、谷中の乞食
に話は坊主愕然貂の皮と申た脇坂淡路守安照様と申
奉行とお勤め遊ばしました時分、谷中に延命院と云
お寺さままで日當と云ふ坊さんが御殿女中と引入れま
した事は恰も十九人に及んだと云ふ事で、随分怪しおらん御
敷地を成すに成すに、丁度右側の角が延命院の地面趾だと申す
扱其の日當といふ坊さんは尾上菊五郎松緑菊五郎と申す人の全く

三
胤だやら、京都本國寺の院代の義當と云ふ人の胤のやら、那方が何
うだの分りません、互に圍ひました婦人の腹に出来ました子です、
けれ共容貌が好いので御殿女中に大騒ぎと遣られた處と見ますてエ
と全くは松緑菊五郎の胤なのだらうと云ふ、此も所謂だらうなので、
那方へ團扇と上げて宜しいの發揮り分りません、現今は東京でも上
方風が最も流行致します、ヤレ大坂鮎、或は貸屋敷で巨大な提灯と
帛下る様に成まして上方風が傳染致して参りましたが、其の以前東
京と、江戸くと申た頃は京都へ参りますと、江戸の物と大層好み
ました、御婦人の御髪に江戸形、或は東都風、又は鮎屋さんで、江
戸鮎杯といふ招牌と掲ました時分、京都の四條下る石垣お駕籠屋さ
んで藤助と云ふ者が有りましたが、此の人は江戸のら彼地へ参つたの
で、夫婦の中にお袖といふ十九に成る娘が一人ございませ、極好い

三
といふ程の女ではあいが、何處とも無く男好の爲ませ質で、此の娘
の扮粧が江戸珍らしい時分の江戸ツ子風で、西京おは只今以て舊弊
髪が多分見ぬますが大坂の方は大きに無く成ました、當今は御婦人
のお身粧か上方風お成まして大きお華美お成ましたが其の頃は娘子
供でも上の人のら見ますると扮装が老實お成て居ませ、此のお袖と
いふ娘子は誠お衆人の眼に付きませ、親父の藤助といふ人は俗に云
ふてエとお芽出度、お心善しでげすが母親はソレ者でげすのら娘に
好旦那でも取らしてと語り始終加減と爲て居ませ、入口には早走り
江戸駕籠と云ふ招牌が掛けて有ませ、妙な招牌も有れば有るもので、
藤助は朝早く仕事おら歸つて参りませても、お内儀さんが膳立と爲
て遣らうじやアなし、一向構ひ附ませんのら藤助は足と洗ひ上へ昇
つて、獨りで胡挑足のお膳と出してお飯と喫ながら四疊敷の所に木

戸番と爲て居ます所へ、權七と云ふ男が「お早う、藤助さん、お内儀さんは在宅のへ藤「お早うございます、權七さんでけするエ權「少しお内儀さんに用が有て来たんだの、大層昇夫さんの癖に御飯が緩りしてユる子藤「ナ今朝早く南泉寺前迄仕事に行つた歸りでけとが、路が泥濘てねエ、三條通りへ来たら草鞋と二足滅茶苦茶に爲て終つて、仕様が有ませんでした、上ッ滑りがして、今歸つた處がお腹が空たのら御飯と喫やうと思つてお膳と出しましたが往けませんか、お茶が沸ねエんで、今鐵瓶と掛けて湯が沸く間待てるんで、ま、お昇んなさいお茶でも入れませう權「イヤ然うしちやア居られねへが、何うのニ、小指は不在のへお内儀はんは藤「居ります、何の御用で權「ナ少し善い話と持て来たんだか、用でも爲てユるのへ藤「イヤ用も何も爲てユやアしません、何でげすエ用向きてエのは權「お前さんで

は少し話が出来ねエんで、……悪く思つちやア不可エよ、少しお内儀さんに限る話しなんだイヤ一寸呼んでお呉ん被成な藤「エー宜うがす、ね崎「く、權七さんが来て、何にのへお前話があるッて、俺ちやア話が分らんのだも藤助さん悪く思つちやア不可ねへヨ、お内儀さんでなくツちやア少し往けねエのだから藤「お崎「、何と爲て居るんだヨ、權七さんが来たてエのに崎「アイよ、今行くよ、オヤ權七さん大きに御無沙汰と致しました少し加減が悪のつたもんでそのら權「加減が悪いとエ、風邪でげせう、今年の風邪は悪いのら、失損のすど不可ねエよ、大切になせエ崎「宅の良人さんは正真にお心善しで困るよ、下らない、だらしの無い事ばあり言ッてサ、早く御飯と喫て終はないの藤「御飯と喫やうと思つても未だ茶が沸ねへ崎「土瓶とお掛よ、其鐵瓶は漏んだヨ藥罐の方が宜ヨ藤「此の鐵瓶は漏のへ、

道理で火が煽ても、チエー、プー熄ると思つた、オヤ、く、崎「オヤ、く、ち
やアない、其處等が灰だらけに成て居る、仕様がないねへ正實お、
早く御飯と喫てお終ひ、足と洗つたるへ藤「洗つた崎「未だ泥が附いて
居たじやアあいの、踵とお見ナ藤「是は厩れへ泥がメリ込んで居るン
だ崎「板の間と能く拭いて置のなくツちやア不可いよ、サ権七さん此
方へお昇んあさい、お前早く御飯と喫てお終ひ權「御免なさい、少し
お内儀さんと色話が有るんで、トキニお内儀さんお前に少し頼み度
事が有るンでげすが、爰で宜様な返辭として宜るへ卒といふ土俵際
でドツコイしよと反覆られると小哥は坊主に成て謝罪つても足ねエ
んだのら宜いのエ、否なら、否と始めのら平ツたく言ッて貰ひ度エ
崎「何んだニ權七さん、何んだの、マア云つて御覽な權「外ぢやアねエ
が小哥も江戸と離れて、當地へ來て居れば何にしる居る處大事で、

お前の處へ時々遊びに來て親類同様に爲て居る事も知ッて在る、小
哥の爲めおは大切な旦那が有るので、宜るへ、其の人から頼まれて、
權七お前は藤助の家と親類同様にして居るのら、一回行つて断つて爲
て見て呉れねへると云ふので、エー宜しうございませと、其時お断
つて終へば宜るつたが請合つて終つて來たんだけれ共、言ひ難い話
だのら云ひ掛けては黙つて歸る事も是迄度々よ、旦那お會ふと何う
したんだ、サ、違へねエ今度は間違ひなく、今度はくくと一日く
と延して置いたが、昨夜扨尾で一盃御馳走に成て胸倉と押付けられ、
サア何うだと切迫詰つて、其ンから明日の朝早く行つてと、實は斯
云ふ譯で來たんだ、餘り前置が長過るが、お袖坊に先方の方が惚て
左や右といふ譯じやアねへ、尤も惚なければ此んな事と云ふ氣遣ひ
も無いが、少し年は取てお在なざるけれ共子供衆が無エので、子供

八
が欲しいくと云つて居て妾にしる、萬更の者は否だ、と云つて
内此の間當家の前と駕籠に乗つて通りながらチヨイとお袖坊と見た
んだ、衆人の目に付く娘だあら目お止つて近所で様子と聞けば氣性
は固し親孝行と云ふ處のら、スツカリ乗が来て其の心持お惚れたて
ユんだが妙な處へ惚れたもンさ、然云ふ者あればと尙々督促れるの
で、其なら聞いて見せうと請合て來は來たが、何うだエ妾に遣ら
ないのなんざア言ひ難いが、妾園者杯と云ふてユと大變な事お思ふ
だらうが、眞逆、然云ふ譯でもあゝ、江戸の方へ聞ゆる氣遣ひもな
し、萬更當家の爲めに成らん事も有るまいと思ふが、否なら否と
ツツリ謝絶つてお呉れと、懐中より金包と取出しお崎の面前へ置き
權「此な物と先へ出して話とすると思ふ奴とお思ひなさるゝ知らぬエ
が、其の旦那の預つた金が茲に三十兩有まゝと、帶代だノ何う斯う

九
云ふのではない、手土産代なので、大變な土産サ、先方で此の金
と取つたら俺の名前と云つて呉い、無闇にパンパと俺の名前と云つ
て終ひ、話が治まらんで否だと云はれた日にア俺が耻と搔くゝら權
七頼んで置くと念と押れたらお前の方で此の金と請取つて呉る迄
は旦那の名前は云へぬエが、應と言やア此の家でも何んだか工合が
悪い、裏の高瀬の方お明地が有るゝら四疊半の三疊位の座敷と建つ
て時々遊びに來やう、普請は此方です、月々の給料は話が極つて
おら仕様ツツで、一時然して呉るゝ何うだ、お前の了簡と聞き
お來たが不可エのユ、断らうの何う仕様崎「まア何うも誠お有難う存
じます、誠お大仕合せ、良人さんお茶とお入よ、其お大きな土瓶と
擔ぎ出たツて仕様が無いよ、藥罐の方が宜よ鐵瓶は漏から、有難う
存じまゝエ子權七さんの前でそが斯遣つて堅くして居ますけれ共、

相手が無ら仕方なし堅くして居るので、宅の良人だつて老る
年で何日が何日迄彼な事とさせて置たの、ア、あいが爲やうがない、
養子と貰ふたつて来やうと云ふ人は此方で氣に入らず此方で宜いと
思ふ人は先方で否だと言ふやうな工合で兎角長し短しで困ります
大結構、先様は誰方……権、誰方だつて金と取らね、内は話と爲て呉
れるな、エ事だのら、大丈夫、云はした跡で、お前さんに沸湯と飲
ませる氣遣ひは無いが、誰だ、エ、權、其のあら吾儕の出した此の金と取
つて置いてお呉る、ぢやア、戴いて置きますが、誰方、先様は、權、跡で否
哉は無らう、チ、ソ、ド、イ、やうだが、念と押して置くが、實ア、大きい聲では
云はれないが、藝人だ、藝人だのらつて、ピン、のら、キリ、迄有、音羽屋の
松縁親方だ、お前の方で、さへ宜けりやア、直に大工でも左官でも遣し
て、木材と持たして遣すせ、大變な事に成ましたが、お袖の方は吾儕

のら、咄と爲たら何うにでも成ます、何卒親方へ宜しく被仰つて下さい
まし、まア、宜うございませう、一ト口附けますから、權、イヤ、然う爲ちや
ア居られね、直に行のね、エと親方が待て居るのら、然う、ぢや
ア、誠にか、勿々さまでございました、何卒親方へ宜しう何れ、又た跡で
お禮お出ますのら、御免なさい、左様なら、良人さん、御挨拶とお爲す
藤「ア、左様なら、權、左様なら、良人さん、お前何とキ、ヨト、爲て
居るんだ、爲やうがないよ、些と確のりお爲なさいよ、早く御飯と
喫てお終ひ、藤「何んだ、御飯と喫ろ、今喫てら、ア、宜
いのら、黙つて御飯と喫てお終ひ、些と發揮くして、呉なく、ツちやア
困るよ、藤「齒が悪いもんだのら、香物が堅くつて、急お噛めね、嘉、イヤ
お早よが、今ア、大きに御苦勞さまで、路が悪いので、草鞋と二足代
なしお爲て終ふだが、今お前はんに分れて、宅へ戻つて行たのや、處

が何うも辛い、何にもする事が出来ないのや、彼の位辛い思ひ
 と爲た事は有りアヘン、家へ戻つて見ると用が出来たのや、其の
 話に就て来たのやが内儀は不在の、嫁はんは藤「お崎は宅お居ま
 が嘉「居るなら一寸會はして呉ンなはらんの藤「何に御用で嘉「何
 ッてお前はんには話が出来ない、お内儀はんでなければ、チヨコト
 工合が悪いのら、會してお呉ンなはれ藤「宜うがアす、お崎「相棒の
 嘉助さんが来て俺じやア話が分らねへといふのら一寸來なよ、お崎
 イ「爲やうが無いよ、お崎「ッて人ばかり呼んで居る……オヤ
 嘉助さんお早うございませ、サお鼻ンなさい嘉「姐君居たの、チ、辛
 苦……姐君が居るんだら何う爲うのと思ふた、今ナ、藤助はんは分
 れて宅へ戻つて御飯イ喰うと思ふと旦那はんの處のら人が來やはつ
 て、嘉助戻つたら、一寸來てヤと云ふさのい、何や分らんが先方さ

んへ行た處が、斯々云ふ話しやが嘉助何うエ、と云はれて見ると吾
 儂やつて大坂のら京へ来てエるものや、其の旦那はんお白眼れては
 京に居る事も出来んのや、吾儂の爲めには大切の旦那はんじやが、
 其の旦那はんが貴家の袖やお惚れたて、夫がナ、其の顔ヤ程に惚た
 のじやア有りアヘンぞと云はしやるのら、何處にいと聴くと氣イお
 惚たてエが、怪態な處に惚たもんヤ、一寸見た計りで氣イが分ると
 云ふのも先方さんが先方さんやのら、妾にせんると云ふのは一体不
 敬、言ひ難い話やけれど、即時家へ入れる事も能う出来ンが、行々
 は何うぞ斯うぞ爲やうが 夫迄の間、此の家では不興、幸ひ裏の高
 瀬に空地が有るのら、四疊半の、三疊の小坐敷と建つて折節其の旦那
 はんが遊びお來やはり、其の金の要用は先方さんで遣すと云やは
 るンやが、姐君が夫で得心すると云ふならば、俺で預つて来たのが

三拾兩の金や、エ、何にやら云ふた、帯代やノ何々やノと云ふのぢやア有りアせん、菓子折代りに持て行けと云やはつた、元々大家の旦那はんもゑ、先方さんで此の金と受ける迄俺の名前と云ふてはあらんぞ、エー宜う御坐いますと請合ふて来た、然云ふたら、胸突くやらうけれ共此の節柄じや、然う堅い事ばあり云ふて居たのて爲やうが有ヤヘン、先方さんが先方さんぢやのらナ先へ寄たら當家の爲めにも成り、俺の手柄にも成まそが、姐君斯う云ふ理由ヤが何うぢやらう、有難う存じます、イ、エ何う致しまして、堅く致して居ますのも相手が無いので仕方がないのらでも嘉マア應と云ふてお呉れささ、先様の御身分はお侍さまでございますと嘉イヤ、然うぢやないささ、ぢやア商人嘉商人でも有りアセン、若し藝人衆では有りませんの、嘉阿房らしい、其ノ様事ちや有りアせん、ぢやア何んで

す嘉堅い、身分の有る人ヤが此の金と請取てお呉ノ内は名前は云はれんのヤ、然うですの、是と戴いたのらッて極る譯では有ませんが、折角のお心持ですのら戴いて置きます、お目には掛りませんが宜しく……確に請合ひましたが先様は嘉金と取たら云ひましヨ、跡で否やは有りアせまいナ、大きな聲では云はれンが、本國寺の御院代義當さんと云ふ旦那はんじや、坊さんでは有るけん、性來奢る人ヤ、お前の方で諾と成たら先方さんでは待て居なはる、此の挨拶とすると直に材木も大工も遣しやはるが差支は有りアせまいナ、藤かさ宜いの、エ、オイ、何にと……宜いよ、藤無闇にお請合ひとして、宜いよ、黙つてお在よ、早くお膳と片附てお終ひ藤、今の音羽……ナニ大工さんでそよ、宜いよ、黙つてお膳と片附けてお終ひお前は黙つて御飯さへ喫て居れば宜い、ハア然うですの、まアお茶

でも……嘉「イヤ〜」然うしては居られまへん。然うですの、誠に
 お匆々さま、ぢやア何うぞ宜しく、左様あら嘉「ハア、畏まりました
 ささ」宜しく嘉「左様あら、藤助さん御免なさい藤「エー、左様なら ささ
 「お前さん少し發輝〜して呉よ、アんな時に何にも知らずに横合
 ろら無間に口と出しては往かないよ藤「往けないツて、今のは坊さんぢ
 やアねへか ささ」坊さんでも何んでも宜いよ、金さへ持て来れば藤「ぢ
 やア先の音羽屋の親方の方と断わるのの ささ」イ、エ藤「夫では今の坊
 さんの方と断わるのの ささ」嘉助さんに對しても今のは断わられない
 ぢやアあいの藤「ぢやア二人の ささ」二人だツて三人だツて宜いぢやア
 ないの藤「宜いの、當人は何うだエ ささ」お袖のへ、お袖は何うも斯
 うも有りやアしあいの、吾儕の胸に在るよ藤「お前の云ふ事と肯くのへ
 ささ」肯いても肯のなくツても宜いよ、何んだいシト、亭主振つて餘

計な口と出して、お前などが御籠と擔いで二百ヤ三百取て来たツて
 何うして家内の者が活て居られるもの、偶には斯う云ふ事が有る
 ろら宜い鹽梅に吾儕が遣り繰つて居るんだ、何んだいシト、亭主振
 つたツて半人前の業も出来やアしない、其の癖御飯は三人前も喫つ
 てる、萬事吾儕の胸に在るのら黙つてお出で、何おしる當人と爰へ
 呼んで聽いて見やう、ナニお袖〜……ろで「ハイ ささ」誰も居あいの
 ら、其處へお坐り、大變な事が出来ちやつた、今度のは坊さんだが
 宜いぢやアないの、身分の有る人だのら然う矢鱈お来る氣遣のひは
 なし、日と極めて来れば兩方へ知れないやうに宜い鹽梅に吾儕がそ
 るのらろで「阿母さん、今度のは坊さん ささ」ア、ろで「音羽屋の親方も
 来るのらろで「ア、そで「坊さんは断るよ ささ」坊さんも来るんだよ
 ろで「二人ア、ア、ろで「嘘言ッ ささ」ナニ嘘と吐くものろで「本當……

；アラ厭な、阿母さん吾儕は坊さんは大嫌ひ、断わつて下さいナ、佛さまと拜みに来る坊さんと見ても慄然とするノ、坊さんは大嫌ひ、断わつて下さいナ、断わつて下さいなッて最う請合つちまひましたよ、宅の佛さまと拜みに来る彼の坊さんでは無い、外の坊さんだよ最う請合ちまッたんだもの、今更爲やうがない藤「メカラ止しねへと云ふんだ、當人お聴いて見も爲ねエで、御飯と啖るノ、お膳と附片るノ胸お在るノ腹に在るノッて溜飲見たやうに、當人に聴きも爲ねエで請合つて何うぞるんだ、宜いゝら黙つてお出よ、當人が不承知なら断わつて終へば宜やチ、黙つてお出でお前まで一緒に成て何と云ふんだエ、お袖お前其んな事と云つては阿母さんが困るよ、何うしても厭なノ、那方が宜いのでエ、吾儕ア坊さんの方が厭なノ、其な我儘と云つては往けぬ、断わる日にやア兩方断わつて終

はなければあらないが片ツ方が坊さんでも片ツ方に音羽屋の親方と云ふ口直しが有るゝら、宜いぢやアないの、忍耐とお爲ナうで「だつて阿母さん知れると往けないもの」「戯談云ちやア往けない、處女過るよ、阿母さん杯は若い時分は亂暴だつたよ、一時に二十六人も旦那が有つて少し骨が折たが外廻しも爲た位だが、何うしたら、此んな阿父さんの様ある人と上方下りまで来たおと思ふと自分で自分が分らない位のものだよ、親方と坊さんと突合つたら親類が来て居ると何ノどの胡魔化して一人と歸るゝら大丈夫だよ、無慚奴も有れば有るもので、お袖は否と云へは兩方断わると云はれ、菊五郎の方と呼んで見度い氣も有まゝゝら、思やあがら兩方得心と致しました、其の内大工が来る、家も出来上る、初めの内は何ノ障りも無く、トノく拍子お旨く行つたが、さて善い事てエものは二ツ無い

もの、其年も過ぎて翌年、盆代りの芝居が、中休み、蒸暑くツて宵からは寝られません。おら音羽屋の親方が四條磧へ供とも連れず只一人で納涼に参りまして、本直しと取寄せ、椽臺の上で、獨酌でグヒグヒ飲で居ますと、ポツリリ降出して来たので、納涼お出た者は八方へハヤク逃出し、其の内に、サーと云ふ車軸と流と雨でげそのら音羽屋の親方も驚いて、羽織と疊んで懐へ押込み雪踏穿で裳とらげ四條石垣の駕籠屋の家と指して、タア〜タ、と駆け参り菊「阿嗅ア〜母親……お袖と呼んでも返辭と爲ないのは、板葺家根へドウドツと當る雨で聴かせんおらだと思ひますおら菊五郎は構はず奥へ往つて見ると夫婦は晝間客でも有つて疲れたの、蚊帳の中おら乗出して寝て居ます、中庭と横に見て椽側傳ひに突當りの四疊半の障子と開けて見ますと、著々とした蚊帳が釣つて有り中

には丸行燈が有まそのら中がすき透つて能く見ゆま、文金の高島田の娘が熱いおして小抱卷おら乳の處まで乗出して寝て居ますと、其脇に丸ウク斯う、ヒカ〜光る圓頂が見えたおら菊五郎はムラ〜としてポーン、足の先で義當の頭と蹴る、其物音にお袖は驚き蚊帳の下と潜り抜けて逃げる義當は何んだの譯が分りませんおら蚊帳と被つてヌーッと突ツ立たおら丸で海坊主見たやうな鹽梅、此の騒ぎに親父も母親も目と登し何事おと出て来ると菊五郎は睨み付け菊「其處に居ねエ〜」藤「へエ今晚は、大きお熱う御坐います」菊「餘り熱いで寝られないおら、磧へ納涼お往くと此の雨に降込められ、お前の處へ這入て来たが大きにお氣の毒な事と爲ました、時に藤助さん、少し前へ出てお呉れ、お前は平生善い人ですおら何も云はないが母親さん最う少し前へ出てお呉れ、妙な事とお前はんの處ではする子

素人ッばい事と云ふ様だが、無手當でも來やアしめへし、初めて權七と掛合ひに遣す時に三十兩上げた筈だし此ンな家でもマア拵へて夫のら後も何だノ、斯だノと云ふのと随分ウソ云つて肯き難い事も肯いて居る積りでぞ、其れでもお前さんは不足なので、不足なら不足と云つて下さい、吾儕と此娘とは年齢が違ふから、厭あら厭と發揮り云へはヒリヒリ何時迄も喰附いて居やうとは思はない是は大きにお邪魔と致しました、斯と知たら來ない方が宜かつたおナニ面目ない、泣たつて爲やうがない、大きにお喧ましろ御坐いました、左様なら、プーイと腹立紛れに歸つて終ひました「阿嚏さん一寸、藤助さんチヨビツと其處に來なはれ、今のは菊五郎ぢやアないの、河原者の分際で、人の頭とボカ〜ア、痛いノ痛くないのツて、剃立の頭と強らい事とさらしやがつた夫れも宜いが、吾儕ぢや

て無手當でも來やしよまいし、最初嘉助に三十兩と云ふ大金と持たして遣して其の上家と作り、お袖がア、ぢやノ斯うぢやノと云ふのとウソ〜肯いて遣つて居るのみ、何おが不足ぢや、吾儕が忌なら忌やと云ふたならば、夫は又夫丈けの話も有るも〜や、人に斷わりもなく彼な者と入れて剩さへ剃立の頭とボカ〜と打やがつて、痛いノ痛くないのツて、何にと云ふても詮方がない最う來やせんぞ口惜しいたつて能う人と今迄欺し居たナ最う何にと云ふたつて肯いソイヤ〜肯いソ〜早う法衣と出して呉れ法衣と、と義當は眞赤に成り蒸鮎魚の様な顔と爲て歸つて終ひました、跡お親子三人鼎足に坐つて呆氣に取られ、大風の吹いた跡のやうでございませと可愛想なのは娘のお袖で、二人の旦那には見放され月經が止まつて五月だと云ふ、胎兒の遣ツ切りが附きませぬ處のら、母親が權七の處へ行つ

て何うの詫言と頼むと權夫は往けない吾儕には決して口が利のれ
ない吾儕が世話として其んな事が有つちやア吾儕が親方に濟ないの
らに前さん達とは最う交際と爲ねエのら何うでも勝手にしろと投出
す處だが、坊さんにもお前の家で二三度會つて萬更知らねへ事も無
エのら明日知らん振で本國寺の入道の方へ何んどの口と利いて遣ら
う、と掛合ひと入れると、却てケンモホロ、の挨拶とされ又一ツの
間違ひ不成まするお話し一寸一息繼ぎませ

第一一席

申上げます、權七は早速翌日本國寺の院代義當の許へ詫事に行くど
院代に於ては決して知らぬ、お前も見た事は無し其んな事と爲た
覺ははないが何に的確の證據でも有て云ふの其んな事と爲た婦
人が有るなら連れて來い吾儕の方では知らないと素ッ張り云ひ放さ

れ權私だつて子供の使ひぢやアなし此の儘では家へ歸れないのら婦
人と當院へ連れて來ても宜うござせエませう子、と是も腹立紛れおア
いと寺と出ました、マア當節東京の御方には、其んな無分別の方は
一人もございますまいが、何に話と爲て先方で分らなく成ると何
處迄も向つて行くのが昔し江戸ツ子と云つた時分の氣象で、權七は
腹立紛れに本國寺と立出で急いで藤助の家へ参りまして權母親已ア
承知しねエ、斯なりやア仕方がねエ、向ふへ廻つて喧嘩面だ、婦人
と連れて來いてエのら、お袖さんも一緒お來ねエとおさきとお袖と
連出しました權「お袖さん息が切れるだらう痲癩紛れにせつせと歩行
くもんだのら、何羞のしいも体裁の悪いも何おも無い遠慮と爲エる
と腹の胎兒が爲やうが無いよ何うでも漕付けて、阿父とチャンと極
めて置ねエでは往けねエ、ノウ母親「然う共く、体裁の悪いも何

にも無い何處迄も話は柔らく云ふのは云ふのだけれ共先方で其ノな
 事と云なれば仕方があるら何にのしなればならぬい權「本當だ先
 方の云卿が悪ければ、悪いやうお爲あくツちやあらぬエ、最う來た
 お頼ウ申まそく」小僧「ドレ、那方おら出やと權「先刻参りやした、
 權七で、駕籠屋の藤助の代で、御院代さんにお目に係り度ンですが
 是非共お目お係り度ンで小僧「ハイお在だも然うやけれと今、用が立
 込で居るおらお目お係れるの何うぢやの知れませんせ權「ぢやア御用
 の濟むまでお立關に待てます是非共會なくツちやアあらぬエ小僧「静
 めにしなはれ何の話お知ンが大きい聲で見共ない權「見共ある事と爲
 たくはねエが據るがねエ小僧「アア静のお爲なはれ今取次ぐおら、エ
 一御院代く先刻参つた權どの申そ人が女子と二人連れて來て尊臺
 にお目おらり度と云つとりますが尊臺何様お遊ばしまと義「居ンど

云へ小僧「居ると云ふて終ひましてオス義「阿房め、能う此方の様子と
 尋ねておら挨拶とそるが宜い小僧「用事が些と立込んで居ると云ふた
 けンと動きまへんで何様な事と爲ても、尊臺お會ンならンて、用が
 有るなら用の濟む迄立關おへハリ附いて居るワイ、とデカイ聲と爲
 て居ます義「チヨツ、仕方がないワ宜おら此方へ通せく」小僧「エ義「此
 方へ通せ小僧「大事おまへんの義「有たツて仕様がぬい小僧「ハイ、此方
 へ昇ンなはれ權「母親アお袖の手と取て遣んなナニ坊さん宜うとせエ
 ます案内にやア及びやせん先刻参つて存じて居ますおら何うだエ母
 親ア好い寺だらう大したもんぢやアねエの此處で院代てエと和尚さ
 んの次の人だ其の人が腹の中の小兒の父親だ、オツと此の部屋だ先
 刻來て知て居る、オツと這入つて跡と縮るが宜い最とお袖前へ出
 なく、へエ先刻は誠に義「ハイお出で、何んぢやの知らンが度々阿

房らしい事と言ふて來なされて實に迷惑とする何んじやア知らんけ
 れせ用が立込んで居るのぢやあらして緩くりお目に係つて工合能う
 話と爲て居る譯には往のン又先刻の様な阿房らしい話なら吾儕聽の
 ンぞ宜う物と積つて考へて見イ苟且にも本國寺の院代たる者が然う
 無闇に表へ出て行て濟うもの濟まぬもの宜う物と積つて考へて
 見イ吾儕に於て其ン事事は知らん夫共本國寺の院代が來たやと云ふ
 て何處の乞食坊主のが吾儕の名前と騙つて往たる知らんが吾儕お於
 てはアソと知らん何んぢや其處へ迎れて來た二人の女子は權アわれ
 だ呆れ反つて物が云はれねエ母親アまで連れて來ても未だアソな事
 と云つて居やアがる何んだエお前さん戲談云つちやア往けませんス
 ヲカリ顔と洗つて宜く御覽ねエ自分の抱寐と爲た婦人と知らねエて
 エ事は有るめエ義アソハ、ハ、ハ、未だアソな事と云ふて居る知らん

云ふたら知らん權母親ア何どの云つて呉んな俺にア迎も受け切れね
 エ大膽不敵おも程があらア「御免なさいましお袖最と前へお出く
 先夜は誠に失禮と爲ました斯う云ふ處へ参りましたは宜しく無いと
 云ふ事も存じて居まそが手前も仕方が有ませんおら一應お詫と爲な
 ければなりません、何も音羽屋の親方と理由の有る事でない云ふ
 事は權七さんが宜く知つて居まそおら權七さんにお頼み申して此お
 詫言はお前さんでなければならぬ余所の人に斯う云ふ話と爲たら
 知りもしない者に迄觸れ散らすやうでは却て尊公の御身分にも係は
 らうと存じましたおら、權七さんにお詫事と頼んだのですが夫んあ
 事は何んでも知らないとはり被仰つて終ひには金お爲やうと思つ
 て來たる強願詐欺とするのとおまで被仰つたさうですおら權七さん
 が眞赤に成て憤つて歸つて來て、此ソな事と云はれちやア黙つて居

られぬエ何んでも二人と連れて来いと先方で云ふんだら往つて
構はない是非共行けど申されましたら参つては尊公の御身分に係
りア爲あいかとも存じましたか、併し權七さんお對して濟ません
ら此娘と連れて参りましたが尊公もお厭あら、お厭で仕方有ませ
んが此娘も妊娠に成て居ますら其の纏まりと附けなければ成ませ
ん尊公も斯云ふ羽目に成つたのでお厭に成つたなら左様仰しやつて
下されば手前の方でも、夫は斯う云ふ譯でとお話と致しますけれ共
知らぬいと計り仰しやいましては吾儕の方でも何分にも仕方がござ
いませぬ何うなすつて下さいますの其所とねエ權七さん權七さん
俺も其の話と爲やうと思つてゐるが知らぬエと計り云つてゐるんだ現在
自分が孕ました胎兒丈でも何うのしてお呉んあせエ義其様事は何
儕知らぬ扉出も爲た事は有りアへん戸外へ出ないものが女子と何う

斯うする譯は無い知らぬと云ふたら知らぬ「夫ぢやア義當さんお
話が出来ません義出来なければ歸んなさい權七さん歸れたつて歸れませぬ
白い黒いの婿も明けず二人と連ちやア歸れませぬ何うなすつてお
呉んなアる義何時迄も其んな事と云ふて居ると爲めに成らぬぞ當院
と何處だと思ふて居る本國寺へ來やがつて、知らぬら知らんと云
ふのぢや早く歸らないと爲めにあらぬぞ權七さん爲めに成らぬエと
爲あ成らぬエ因縁と聽きませう義殿打ぞ汝れ權七さん打あせエ打た
れたつて此處は動おれませぬ次第に寄たら出る處へ出て砂利と搦ん
でも白黒と附けなくツちやアならぬエ何どの話と附なけりやア、此
姪の親父に對して私しが濟あいら何うあつても歸られませぬお前
さんは幾ら知らぬと云つても此方に何日の幾日に來たてエ確かな
証據が有るんだ義何にが証據ぢや何處までも知らぬと云ふたら知ら

番僧「ハイ一寸御免なはれ義何んじや二人で来て、此方へお這入り
 番僧「ハイ御免なはれ義何んじや番僧「今師の御坊が廁へ行うとして、
 尊公の部屋の前を通りやしやると大い聲で話と爲て居るが何んじや
 ろとお尋ねでござりまそのら實は斯々いふ話で何にやら其の妾の腹
 に兒が出来たと云ふて掛合ひお來た容子でオスど斯う申上げまると
 師の御坊が吾儕輩兩人に向つて阿房め義當が其んな事とする氣遣ひ
 は無い院代とも勤めて居ながら其んな事とする氣遣ひは決してあり
 アせんが左様な風体の者が掛合に來る事杯が有つては寺中の者に對
 して以後の取締りが附のら……尊公の身邊おへハリ附て居て何
 日の幾日に尊公が行たの其の理屈の分る迄へハリ附いて聽いて來
 若し又分疏の出來様なれば仕方があるのら、法衣と被奪て寺法通
 りお扱はうと仰しやり付けで師の御坊も襖ごしに聽いて御坐るのら

アツタ方も阿房らしい大きな聲とせんでも緩くり話と爲なはれ何日
 の幾日に院代はんが和郎さんの處へ指して行と云ふ事が有れば、云
 ひなはれ院代はんも亦然うぢや先方はんで尋ねた時知らんなれば斯
 云ふ事やから知らんと發輝り爲た處と云ひなはれ義「吾儕ア知らんの
 ヤ番僧「夫はいのン、只知らンくでは分らんのら何う云ふ處で知ら
 んの夫と云ひなはれ何日の幾日お院代はんが、和郎さんの家へ指し
 て行たの夫と云ひなはれ權「コレハ坊さんが二人殖て結構だ實は斯云
 ふ譯で番僧「御院代はんが行たの何日行た權「何日來たッて一昨日の晩
 なンで一昨日の晩れ出なすッて私も參つて居たが一盃機嫌のらツイ
 少し悪い洒落として悪のつたのら詫に來ると知らねエと云ふンだけ
 れ共此娘が通常の身体なれば私だつて何にも云ひませんが妊娠お成
 つて五月でげす胎兒の遺場に爲やうが有ませんのらお詫ひに參つた

のでござへまゝと 番僧「ウム、一昨日の夜和郎の處へ何時のら行た
 「何時のら來たツてアノ夕方です七ッ少し廻つた時分にか入來に成つ
 て五ッ半彼是れ四ッ時分おれ歸りに成ました其の時少し間違ひが
 出來ましたので 番僧「一昨日の七ッ少し廻つた時分から四ッ頃迄に其
 折院代はんの何處へ行てお在るはつた 義「何處へも行きアセン 番僧「イ
 ヤ一昨日尊公はんの七ッ頃山内と出やしやツて四ッ少し廻つた頃に
 戻つて來やしやツたが彼の折は何處へ行きアしやつた 義「何處へも行
 きアセン 番僧「甲「インニヤ行きなはつたノウ 番僧「乙「行たノウ 確たしのお行
 た吾儕が能う知て居るヲ尊公何處へお出あはつた 義「ウム、と腕組とし
 て暫く考へ 義「ホニに俺は一昨日出た一寸出た 甲「一寸出て何處へ行き
 なはつた 義「貴様達が其そのな事と調ベンでも宜エツ 甲「吾儕共二人は夫
 と聞きに來たのヤさるへ 義「餘り熱いあつのら山内に納涼んで居たが納なが

喰ひ居つて爲やうがないのら歩行く共なくアラノ四條の磧がはらと廻つ
 て來たのヤ 權「四條磧で納涼んでお在なすつた、と嘘うそとお吐きみせ
 義「嘘うその眞實ほんとうの汝お知つて居るの 權「彼の時は雨がドンノ降りました
 がアノ雨がドンノ降る中で納涼んでお在なすつたのニ 義「ム、雨が
 降つたのらツて家が有る 權「磧がはらにア家は有ませんサア何處へ行きな
 つた 甲「何處へ行きなはつた 義「ヨ四條の袈裟六の家へ行て御馳走ごちそうお成
 て戻つて來たのヤ 甲「夫おのら未だ何日行たな 義「アノ十日の日には朝
 ろらお入來に成まして少し買物が有るのら一緒お行つて貰ひ度と被お
 仰つて此娘と吾儕と二人がお供として襟善むすねで半襟はんせきと買つて戴いたきまし
 て茲こゝに掛けて居まそ其の時の請取書うけとりも確たしのお有ます襟善むすねの番頭さん
 に聞いても分ります 義「知らんがノ其その處へ行た覺おぼはは有りアせん
 甲「行きアせんと云つても尊公十日の日は行いのら事ことはどうへん朝早あそう

出やしやつたが何處へ行きぬしやつた義「エーイ能くチヨベコベ側
 ら口と出し居つてアノ折は今熊通りの伊勢屋へ用が有て往たが夕方
 戻つたのら先方へ行た覺は有りやせん」夫じやア五日は義「エー
 用が仰山有るのらテンと忘れて終ふた知らんのら知らんのヤ此方に
 は確のに知らんと云ふ証據が有るのヤ權「何にが証據でと義「何んでも
 宜いワ確のに知らんと云ふ証據が有る彼の女子が吾儕の爲めに兒が
 出來たと云ふが吾儕の方ふは確のに兒が出來んと云ふ証據が有るが
 是は何うぢや吾儕は眞實の事三才の時ふ兩親お分れて終ふて孤子お
 成り六才の折に或人相見が吾儕と觀て劍難の相が有るのら出家させ
 たら何うぢやらうのと云ふて七才の折に此の寺へ這入り師の御坊の
 丹誠で是迄に成たが十六の折お説法と聽いて不圖思ひ付たは五戒の
 中邪淫戒計りは實に慎まれんものヤ一番出來易いやうで出來難い事

と悟つて吾儕は十六の折に羅切して終ふた羅切した者に子が出來る
 の「甲「尊公羅切爲やしやつたの權「サア是が肝腎だヨお袖さん赤く成て
 然う愚圖く爲てエてはいけぬエ何どの云ひなよ義當さんは羅切し
 たのら子供が出來ないと云ふのだ確のに然うで有まその義「嘘は云や
 せん權「嘘でなければ一遍見せてお貰ひ申ませう、サ拜見爲ませう義
 「阿房吐せ何ンば何ンやつて出せるのエ權「出せるのつて見ぬエものは
 分りませんから確のな處と見せて貰ひませう義「已が出すのヤあいと
 思ふて權「昨日や今日切たノヒヤア聞させんヨ義「吐そな見せエでの、
 と立上つて前と捲つて見せると成程昨日や今日切た様ではあゝ古い
 以前に切た様なのと突附けられた時には一同アツと開いた口が塞が
 りません娘は羞らつて屈伏で居ます義當は居丈け高に成り義「コレで
 も覺えが有ると吐すの何だ權「へエー左様で、宜しうございませと義「ア

ハ、番僧丙「モシ院代さん方丈さまが早く三人の者と逃して終へ然
 うして少し話があるら方丈へと仰しやり付けで義ア左様のぢやア
 行ね今日は放免てやるら行ね、權七おさきは何だの譯が分り
 ませんけれ共仕方がないら袖と連れて宅へ歸つて参りましたが
 サア胎兒の遺切が附きませんら權七と以て菊五郎へ詫事と入れる
 と菊五郎の女房は物の分つた人で親方の胤お相違なければ引取ら
 うが其の代り親子縁切だト話が纏まり五月目ら菊五郎の女房ら月
 々の贈物と致し十月満てオギヤと産み落したは玉のやうな男の兒
 で七夜お名前と丑之助と附け二才の時に菊五郎の方へ引取りまして
 此方の方附ましたが一方の義當の羅切と言つたはまッのいナ偽りで
 堀川筋へ参りましたして長崎歸りの醫師龍齋お頼み何うのいふ方で男根
 と揉込み薬と貼つて古い切り口のやうに見せたので、併し悪事千里

で誰いふとなくヒッくと陰言と云ふので居悪くあり潜るに本國寺
 と脱して是ら江戸へ参り谷中の感應院の弟子と成り後に下総の蓮
 沼村に於て蓮華往生と企てまといふ、又丑之助が生長して後延命
 院の日當お成ますッロくと端緒でござりませ

第三席

扱も丑之助は二才の時ら菊五郎方へ引取られて育てられたが成長
 く成るに従つて物覺は宜し菊五郎は實子が無いので坊々と云つて
 掌の内の玉のやうに大切おして育て、居ましたがお話は早いもので
 丑之助か七歳の時初舞臺お大坂の西座へ出ましたお殊の外評判が好
 く日増しに人氣も附いて参り子役の中でも一二と云ふ屈指に成まし
 たので菊五郎は大自慢で居ましたが丁度丑之助が十六の歳に菊五郎
 に連れられて江戸へ来て市村竹之丞の座へ下りまして親子で看板と

揚ると些ども客が来ない二度目に看板と揚たが是も不入り三度目も同様乃で家元も金方も愛想と盡し茶屋も貧乏神が下つたと陰言と云ふので菊五郎も今は大坂へも歸られず、江戸小居た處が仕方もない、一層の事親子で旅役者と化けるより他に爲様がない併し自分を取る年齢なら宜いが、十六七に成る丑之助と旅へ落すも可愛想だ、是丈は本當の役者に爲たいと流石は親子の情で其の頃木場に居た五代目團十郎お餘處ながら頼みまどと團十郎さんマアお待ちコレで歸れば花も實もない、吾儕が交つて進るのら、一回打て御覽、と此時の狂言は歌舞伎年代記に出て居まして私が申すまでもございませんが其の團十郎が打交つての演劇が大入で是のら日々菊五郎の人氣が江戸お出て参りましたスルと上方で名人と云はれました嵐雛助が死去つて立て物か無いのら音羽屋に歸つて呉ると云ふ節々の

手紙、當時音羽屋は病氣にて重い枕に就て居ますのら悴丑之助丈一人上方へ歸しましたが、是が十九の秋で處が、嵐雛助の悴と重助と申す、是も後に名人と云はれた人で、丑之助と同一年の十九でげそのら互に威勢争ひとして定めて情交が悪のらうと思ひの外極中よしで、兄弟でもマアは行くまいと思ふ程で、重助が丑之助の家へ泊りと爲ましたり丑之助が重助の家で寐泊りと爲て居ましたか或時顔見せ狂言で演劇がハチテのら客に連れられ重助は弟子と五六人連れて難波の岡屋へ参りましたが此時連れた弟子の中お新兵衛といふのが有まして江戸のら参つた者で先代の雛助時分のら番頭同様お家の切盛と爲て居ますが、性來お酒の好みの病で酒の上の悪い酔ふとイヤアお人にのらふといふ性の男で此夜岡屋の女中お土産と拵へて貰ひ新今晚はお先さへ左様なら重危險いよ氣と附けて行きなよ新

「エ、宜うがす幾ら酔たつて大丈夫だ間違ひの有る譯のものじやアね
 エチラ〜雪が降つて来たのら少し積つたと思つたら最う余ッ程積
 つた、併し大坂の雪は澤山積らねエが江戸の様お積つて貰ひたいな
 ア吾儕ア見ふいが信州越後のやうに降ても歩行く事が出来ねエのも
 困るが、ヤア町内は最う少し賑やうだと思つたらメンともツンとも
 三味線の音が爲ねエ、へエ只今歸りましたオイお清どん居ねエの
 エお竹どん寝るのも大概に爲ねエ、オイおきよどん 内儀「アイよ今開
 けるよ新」是は恐入ります一寸開けて下さいまし 内儀「新兵衛の
 新兵衛で何卒チヨイと開て下さいまし、カラ〜」と 内儀「よ、
 大層臭いねエ又酔つて歸つて来た子一人のエ新」若人主も皆は跡へ残
 つて吾儕丈ね先へコレはお内儀さんにお土産で 内儀「折と出したつて
 底が抜けちまつて何おも有りやア爲ふい新」オヤ〜 儲のお入れて来

たのがオヤ〜見て来ませうの 内儀「見て来なくとも宜い跡は吾儕が
 締めるのら、早く部屋へ行つて寝てお終ひ何日も〜酔つて来て困
 る子新」酔たつて宜いぢやア有ませんの酒と飲んでも飲まいでも勤め
 る處は急度勤める 内儀「早く部屋へ行つて寝てお終ひ小言ぢやア無い
 よ小言ぢやアないがお前も飲み度い酒あれば飲むぢやないが男衆
 が先へ歸つて肝腎の親方と跡お残して来ると云ふ事が有ますの 新「イ
 エ然う云ふ譯では有ませんが貴婦がお一人でお淋しのらうと思つて
 内儀「きよも竹も居るのら淋しい事は有りやアしない新」何おしる奥へ
 参りませう 内儀「来なくツても宜いよ新」行つたツて宜うございませ別
 段差支は有ませまいマアお内儀さん往つて御覽あさい天満の市場の
 ら若主人の處へ何うも大變な引幕が来ましたせ強らい人氣で若主人
 は大變る者でげす今度の狂言杯は死だ親方ソツクリだ何だつて客

が皆涙と涙して居るンでげモア、一恐しく酔ひました鴨屋でどのし
 うがしたせ舞子が三人藝子が二人若主人に岡惚て居たのは可笑うが
 した兄さん何うの爲てお呉ンあはれなソのツてア、一好い心持だ内
 儀「早く彼方へ行つてお寝よ」然う寝ろ〜と云はなくつても宜い貴
 婦は未だお就寝あさいませんの幾ら吾儕が叩いてもお竹せんもたき
 よせんも起きねエのは不敬ぢやア有ませんの内儀「きよは少し用が有
 つて宵に宿へ行つたのら竹計りだよ」新「作處に寝て居ます内儀何處だ
 つて宜いぢやアないの二階に寝て居るが悪るふさげと爲でないよ
 新「だって私が叩いても開けて呉ないのら内儀開場中は朝が早いのら
 吾儕が起きやうと思つてもナンだのら夜は先へ寝おして朝早く起き
 て貰らふのだが其んな餘計な事と云はなくても宜いのら彼方へ行つ
 てお寝よ」新「其様お寝ろ〜と云はなくつても宜う御坐います今日

髪と結つた子内儀「男の癖お其んな事と云はなくても宜い新「髪と結つ
 たのら結つたのと聴くンで何うもれ美しい子内儀「何んだエ吾儕のや
 うな年と取たものと捕まへてモウ宜いのら彼方へ行つて寝〜新
 「ト一言云ふと二々言目には寐おしたがるが然う寐おしたがるンでも
 宜い、だけれ共御内儀貴婦も江戸だ吾儕も江戸ッ子同志でなければ
 話合はねエ大きな聲で云つちやア濟みませんが上方贅祿は爲やは
 がない客齋れな事ばあり云つて、子、夫のら斯う言つては悪るいけ
 れ共エト幕内の評判は強らいもんだよ内儀「何おが新「何おがッて成
 田屋の家のが後家さんで置くのは惜しい勿体ねへと云ふ評判が大變
 なもんだよ内儀「誰、吾儕エ忌な戯談云つては不可いよ新「戯談じやアな
 いよれ前さんお馬鹿に惚て居るものが有るンで内儀「お惚りでないよ
 新「惚るンでも何んでも無いよ有つたら何う爲ます本當お惚たんだ内

儀「本當なら煎豆の花が咲んで其んな茶人が有るものエ新上方は茶
 處です若し有つたら、貴婦腹と立ちますの嬉しうございますか 内儀
 「夫は譽められるのが宜いゝ悪く云はれるのが宜いゝと云へば譽め
 られるのが宜いゝ極つて居る新「イヨ一強らい 内儀「何んだチ大きな聲
 とれ出しでゐいゝ新「強らい本統に惚てるンで 内儀「其んな事と云はる
 くツても宜いゝ新「宜いたツて本當の話で若し惚てたら何う爲ます 内
 儀「だのら今さう云ふ通りサ新「本當でそのエ 内儀「本當サ新「本當なら實
 は其の 内儀「何にガサ新「ウフ、ウフ、ウフ、ウフ、貴婦憤りますの 内儀「憤り
 も何うも爲ないゝ新「憤らなければ云ふが實は貴婦あれば命も身上も
 入らないてエ程に惚てるンで 内儀「誰が、新兵衛は天窓と押へモツ
 爲ながら新「實はウフ、ウフ、アハ、アハ、面白いヤ何うも未だお湯が沸て
 居ますの沸てるゝら一杯戴きませう 内儀「お前の部屋へ行つたツて火

は有るよ何と愚圖く云つてるンだエ新「實は濟みませんが吾儕は貴
 婦にねマア親方だつて死去つて間の無エ處ろで此んな事と云つちや
 ア濟みませんが貴婦が元櫓下にお出なさる時分ゝら吾儕は何にして
 居ましたが親方と云ふ者と何に成つて此の大坂迄親方の跡と尾て來
 た其の貴婦に此んな事と云つちやア誠に濟まゐいけれ共親方もア、
 云ふ事に成んなもツて若主人迎も未だ若し其の中で何う斯うと云
 つては濟みませんが吾儕が 内儀「馬鹿な事と云ひでないゝ其ゝ馬
 鹿と云はずに彼方へ行つて早くお寝なさいゝ馬鹿と云ひでない 新
 「馬鹿じやアない本當の話し 内儀「今夜は遅いゝら何小も云はないゝら
 早く部屋へ行つてお寝く 誰も居ない處ろで其ゝ馬鹿な事と云つ
 て新「誰も居ねエ處ろが此方の附目で先へ願つて歸つて來たンでけす
 内儀「新兵衛ね前夫は全くで云ふのゝエ新「全くで云ふたツて戯談に此

ンな事は云はれませんよ 内儀「ぢやア本當に云ふのゝ呆れて物が云はれないね前計りは其ンな人間ではないと思つた親方がお死去りの時に何んとお云ひだいか前と枕元に呼んで重助は未だ若いゝ頼むよ」と被仰つたら何うとの斯うどの忠義がつた事と云つた癖お吾儕とば其ンな猥らな人間だと思つて居るのゝエ、何程何んだつて眞逆お前達に馬鹿にされる積りは無い吾儕の様な人間だつて一生後家と立通す氣だよ重助も未だ若いお藝人は早く女房と持てはいけないと云ふけれ共彼が氣に適た藝子さんでも有るなら貰つて孫の世話でもするのよ樂しみお爲て居る者と捕まへて何んだつて其ンな事と云ふんだ今夜は何にも云はるゝ重助が歸つたら此の事と云はずには居られません怖いよ夜が更けて居るゝ早く彼方へ行って寝てお終ひと云ひながら突ッ轉ばと新ッ突ッ轉ばしたつて其處の所とまア〜宜

うございませ 内儀「宜のゝ無い早く寝てお終ひ本當お呆れ反つて物が云はれないろんなにバタ〜遣つてたつて開きアしあいの襖に鍵が下て居るゝら寝ちまひなく丑さん最う宜いから此方へれ出よ」戸棚のら出ても宜いのゝエ、チー大寒む〜 内儀「吾儕は寝ちまつたのと思つたよ」丑「戸棚は寒いゝら眠られない隙間のらスースー風がは入つて新兵衛は最う彼方へ行つて寝たのゝ 内儀「澄まして其處お座つて居れば宜いのよ」丑「座つちやア居られない重さんが居る時なれば宜いが脛疵で座つては居られない 内儀「アノ新兵衛位忌な奴は無いよ本當に氣お喰ふい忌な奴だよ」丑「オヤ今の鐘は天王寺の子刻だゝら歸らら内儀「雪が降り出して來たよ」丑「歸るゝら何んと、羽織と出してお呉れ羽織と 内儀「羽織とつて此の雪で歸られるものかね」お燭がついたゝら「ア一盃れ飲み」丑「阿母さんが宜くないと云ふ事だ何んだゝ今夜は

胸動悸かするのら歸るよ羽織と出して呉れよ内儀「然う歸り度がる
 のと無理に止やアしないが大丈夫だよ重助は歸りアしないのら丑「大
 丈夫だつて歸り度いもの内儀心配の有る處と無理矢利に止める譯で
 はないのら歸るならお歸りだがお前當家に居るのが忌あノ丑「忌と云
 ふ譯では無いが明朝の演劇が早いのら羽織と出して呉れな内儀「お
 前が早ければ重助だつて早いよ却つて當家より直に木戸と開けて往
 けば早のらうとおもふか歸りたければお歸りあ丑「歸り度は無いが新
 兵衛に何にの變な事と云はれると重助さんに体裁が悪い内儀「知らず
 に居るヨ丑「ナニ知れるよ内儀「新兵衛が來たらチヨイと隠れて終へば
 宜いじやアないの丑「隠れるたつて吾儕は忌だ歸らう」内儀「頑童：
 丑「到底吾儕は頑童だのら歸る内儀「何と云ノ、夫は當然サ、重助と
 同い年のお前お吾儕が此な事と云のだから忌がられるのは當然だ歸

り度と云のと無理に止める譯では無が餘り寒いのらマア一口飲で
 ろらお出ヨ、と丑之助の手と取て火鉢の向前に座り盃と遣たり取た
 り致し宜い加減に切揚げて二枚折の屏風の内へは入りましたが新兵
 衛は自分の部屋へ行くのも体裁が悪く眠た振りと爲て居る内に呑氣
 ある者でグウ〜と云ふ高聲と搔て寢込ましたが領元へスウ〜雪風
 がは入りますのら眠ては居られません新「ア、ア、寒い〜と欠伸と
 し腕と搔ながらア〜寒い〜オヤ板の間へ寢て居たユ〜イ心持ちが
 悪いナサア失策た〜是は弱つた歸て來て後家お小當りお當る積り
 で昇て小當りに當ると頭とボカ〜とお出なさつてト〜の括りが重
 助に云告るアノ又若主人は變に親孝行だのら新兵衛は阿母さんお向
 て頼でも無い事と云ふ出て行ニ、直にお拂ひ箱だ然したら葉村屋へ
 行て詫事と頼まう、ア〜〜、小便が、ハーテナ、若主人がね歸んな

さつたが知ら歸れば俺が板の間に寝て居れば新兵衛、風邪と引くよ
早く行て寝なよと云ふんだがオヤ話し聲がする何だの分らないが話
が無くなツちまつたお内儀さんが寝言と云つて居るの知ら一体大
坂の土地は瀧に障るなア襖にヤエンが下て居るのだが斯云ふ時の要
慎と思て先刻小揚枝と突ツつて置たおら扱ば宜んだ、と雖て、襖
と開けて見ました

第三席

扱て新兵衛が向ふと見ますると座敷おは上方風の朱塗の丸行燈か點
て長手の火鉢に鐵瓶が掛けて有モウ火の落際と見れて時々チーイ
と云つて居る様子、又朱塗の箱膳には喰散した物が散つて居りま
す又傍の二枚折の半屏風の中とば見る氣も無くヒヨいと覗くと朝鮮
人が笠と冠つたやうな髪マボの艶々した後家の側に艶々した若衆鬘

が見えますのら新「ハハア斯ンなもの有るんで俺とボカ〜毆打と
つた事の、と思ひまるとカア〜と堰上げ主家來の見界も何にも無く
痲痺の虫が込み揚げて来て腹立紛れに沱屋橋の長い太い煙管と振廻
して新「何んだ先刻の言草は一生後家と立通と云つた癖お此の爲体
は何んだ内儀誰だエ、其處に來て居るのは新「新兵衛が枕元で煙草と
喫でまそ新兵衛だつて少しは煙草と喫まそ誠に氣の毒さま内儀驚
惚したアね新「何にも出て來ねエでも宜うとせエまそ大きお喧しう
とさいました内儀「お前は何しに來たエお前の部屋にだつて火が有る
じやアない新「部屋の火が熄たおらサ今日始めてははない吾儕ア行
燈の灯火ぢやア煙草が喫ない此處へ來て火位點たつて何にも不思議
は無エ新兵衛だつて煙草と喫ますのらナ内儀「驚惚したよ呆れ反つ
た新「人間の家へ人間がは入るのに別段不思議は有ません氣の毒

さま大きに喧ましうございました構はずお休みなすつて 内儀「お休
 みなぞつてと云つて何うしてお前締りと開けては入つて来たよ新「何
 うしたつて盗賊じやア有ません幽霊じやア有ません開いたら開け
 ては入つて来ました何にも不思議は無エヒやア有ませんの不圖お邪
 魔と致しました 内儀「何うして来たんだよ何にしにサ締りと開けて 新
 「エー焦慮エ 内儀「焦慮いとは何んだい新「吾儕ア締りと見お来ました 内
 儀「締りと見るなれば門口と見て呉れば宜い奥の方は吾儕が預つて
 ら新「ソレ御覽なさい障子がピツシヨリ濡れて居るじやアないのハヤ
 リく 劇場裏の木戸が開いて居ますがアレは非常口どの何んどの云
 ふのでは有ませんの滅多お開けあいの口の締りが開いて、宜うござい
 ますの若主人に頼まれて先へ歸つて来たのも宅は女計りだといふの
 で他の弟子より先へ歸つて締りと見るお何お不思議は有ません 内

儀「夜夜中女一人の處へ来て頼でもない新「へエ誠に頼でもございませ
 ン貴婦一人の處へ人がは入つて来たら頼でもなあらうが吾儕一人で
 茲へ這入つて来たのじやアござえません男二人お女一人なんで 内儀
 「何にの思な事と云つてる新「貴婦が入れなすつたんでせう御存じ
 有ませんの 内儀「知りませんよ新「少しお退きなせえまし何にも通せん
 ばうと爲あくつても宜い貴婦は知らんでも彼處に人間が轉がつて居
 ます一トツ見やうじやアあいの 内儀「誰も居やア爲ないよ新「居ねエ事
 ア有ません貴婦が入れたんでなければ其處とお退きあさいソレ御覽
 なさい何の飛出した盗賊め、何おと爲たつて宜うござえます一休彼
 れに何で 内儀「アレは丁度雪が降つて来たあら何んして呉ると云つて
 何んして居るの、立物さんだよ新「立物さんあら立物さんらしく爲て
 居れば御挨拶と爲ますエ、音羽屋の丑之助さんなら私も知つてませ

貴婦は全体御存じねエンで丑之助さんでも立物さんでもねエ彼れは盗賊なんで、エ、此の盗賊め、と恰で猫ッ兒同様丑之助の領髪と掴んで疊で鼻と摺付ける丑之助の腹ではナニ此の送り位と云ふ天狗が有ますのら振放と拍子に突た拳が丁度旨く行つたものゝ新兵衛の助骨三枚目當りへボカリ新「ウーン、パターリ倒れる内儀」オヤ容子が變だよ「丑」だのら吾儕は忌だと云ふんだ内儀「早く」其處に駒下駄が有るのら「チョイと阿母さんに黙つて在よ……、此時表の戸とトン」ト「男」「チョッと茲と開けて下はれ重」阿母さん「チョイとお開けなすつて下さいまし内儀」アイヨ今開けるよおきよ起きなくつても宜いよオヤ「」を歸へりなさい重「へエ只今、大きに遅く成りました長いお酒でツイ「」遅く成ました若イ衆大きに御苦勞さま「チョイと阿母さんお酒と飲む人には飲ませる方が宜いでは有ませんの内儀」少しい

けあいの客が有るのら重「誰が来て居ます、さうでその、アノ若衆誠お御苦勞さま今日は一ッ借て置さまと明日は何うの早く序幕と開けて貰はあいとハチが通くなるよ宜ウく被仰つて下さい御免なさい左様あら内儀、大きお御苦勞さま男「左様なら重」阿母さん「私が締めまよ女中が一人宵に宿へ行つたと聞きましたかおはつのですのら奥へ行きますせうれ客さまが長ッ尻でツイ遅く成りやしたがシテ内のお客さまエのは内儀、然うじやアないが實は大變な事が出来ちまつたよ新兵衛が鷗屋のら大層酔て来て「重」何おの失禮でも有りアしませんの若し失策ひでも有ましたらマア御勘辨とみとつて内儀「ナニ新兵衛が吾儕の寝て居る處へ来て猥褻しい事とるのら振拂ふ拍子に臂が助骨へ當つて其の儘轉覆つて終つた處へ前が歸つたのだが若し夫ッ切お成たら何う爲たもンだらう重「ナニ其ノな事は有ません虚で

す私が此の間難波の國手に聽きましたたが舞臺で人と殺すやうなアン
 な事で人が死ぬ譯のものではないと被仰いました幾ら阿母さんが一
 生懸命に成たつて女の蚊細い腕で突たつて其の事がある氣遣ひは
 有ません串藏と云つて体裁が悪いもんですのら死んだふりと爲て居
 るんでせうドレ起して遣りませうサ新兵衛くね前が悪いよ阿母さ
 んに毆打たつて爲やうがあるい吾儕が謝罪て進るのらサ新兵衛洒落も
 餘りクドイよオイ新兵衛と言ひ乍らサツと直視め重憚りさま行燈と
 エー其の位で宜しい、ヨリヤ今でそのハ一テナ是りヤモウ往かせ
 んナこれは往かせん宜うございませ何うの爲ませう詰り此奴が悪い
 いので阿父さんが死ななほそつて間も無いのふ主人に對して串藏と仕
 掛けたのでそのら主人の罰が中つたので宜うございます天満の旦那
 方にね願ひ申して内分に爲たら何うの治りが附させませう阿母さん誰

の來やア爲ません此處に丑之助さんの來襲だノ煙草入が有ませんが
 斯んな物が有つては却つていけません私は是のら直お行きませう、
 と年は十九でも何處の違つたもので平生のら樂屋内で宅の慈母と丑
 之助と變だくと云ふ噂が有るが豈夫と思つたが眞實だワイ大事な
 賣出しの役者と殺して終つた處が新兵衛の助ある譯もあし可愛想だ
 が死ぬもの貧乏と云ふ譬の通り音羽屋の伯父さんには厄介お成つた
 事も有るのら、と夜の明けない内に天満與力へ手と廻しましたたが現
 今だつて往時だつて一人の命は貴い其處と旨く頓死の様にして
 事と濟ませたは重藏の計らひで有ました又丑之助の方では此の事と
 知らず的切新兵衛と殺した事と思込で母の處へ書置と残し其場の
 ら大坂と透電なし江戸表へ参りました

第四席

丑之助は大坂より江戸と差して出立いたしました。本街道は何ンとなく気が咎めまそ況て其の頃俳優が道中と致するまどやしますと、馬丁や雲助に強請られて誠に面倒なつたさうでげす夫ゆる大坂と出まして三里参りますると暗がり峠と申所へ掛りました此峠は搦手の要害だと申すことで大坂よりは爪先上りで是より奈良へ出て木津川より笠置峠へ出ました。後醍醐天皇の崩御に成ました笠置山と右手に見まして伊賀の城下に出ましたは自分が親父と一緒に芝居と打に参り御最負のお客の家が有ますあらで、是へ一泊いたしまして伊賀より龜山と來ました。が龜山から伊勢の津へ懸り伊勢の山田へ参り、古市でも前方興行と爲て御最負の客さまが有ます。其家へ泊り志州の鳥羽浦より尾張の龜崎へ参りました。が彼の邊は御案内の通り酒が出来ます其の酒樽と一緒に積れ船に乗つて江戸へ参りました。

翌年の三月上旬、元より坊さんお成る氣でげそのら直と谷中延命院へ参りました。是は住職日竟が自分が市村座お居ました時に最負お成りました。が、此の上人さんは今年六十二お成る老僧丈けに丑之助が坊さんに爲て呉いと頼んでも容易にして呉ませ。日何うして、二十一や二十二に成る者が僧侶に成らう。杯といふは大變な了簡達ひ殊にお前は男は好し中々婦女子が打棄ては置の併し譯と聽いて見れば大坂で悪い事と爲て來た容子まアまア寺お居るが宜いと今の様に東京と大坂とは手紙が自由お参りませ。二兎も角も寺へ置いたら行々自分より思ひ成らうと思つて寺へ置くも果して檀家の評判が宜く有ませ。あら丑之助とば一檀家の駒込片町の八百屋へ預けました。すると其處の家お奇麗な娘が二人有まして丑之助に岡惚た容子だ。あら是で僧侶に成る念と斷つと思つて居まると丑之助が時々逃

して来ては娘が猥褻い事と云つて往けませんと云ふの上人が欺し
 く遣つて置きましたたが段々逃て来るのが烈しく成ましたら能く
 容子と見まするに全く婦女の念と断たらしい丑和尚さん彌々私と僧
 侶ふして下さらんなら仕方があるませぬら他のお寺で僧侶に成りま
 そ、と思ひ込で云ふ容子が確前に出家の修行が出来さうだと鑑定が
 附て丑之助が二十二の暮に頭髪と剃まして名と道竟と附けました丑
 之助は色氣お放れ慾には離れ只一心に修業に心掛けました根が如
 才ない性だのら師匠の諸方へ説法に出まそ供として歩行いて居る内
 にチヨイと演ずると中々巧い學問はないが俳優訛りで辨が切れて居
 ますのら説法の工合が宜いので終おは檀家の受けが師匠日竟より宜
 いやうあ事に成ました、處が道竟の二十八の年お師匠が死去り道竟
 は中年の坊さんに成ましかから、幾ら何んだつて一ヶ寺の和尚さん

に成まそ丈の學問は無い併し平常の檀家の受けが宜いのでナニ他
 らお上人と直すおア及ばね、道竟と住職にそるが宜い、師匠の
 跡と弟子が續ぐお何おも不思議は無いと、檀家一同の勧めお依り名
 前と日當と改めて延命院の住職に直り惰らす勤て居ました、凡ろ人
 は盛つて参る時にはチヨイと魔のさしますもので、此の日當の魔と
 云ふのは外でも有ませんが此頃駒込片町お大立小八郎と云ふ御旗本
 があつて御鳥見番頭と勤められましたたが八十九でお死去に成ました
 此の方の御菩提所が延命院でけすから之へ葬りました、其の時娘
 御の衆村といふ御方は御殿奉公と致して居まして三夜のお暇願ひと
 爲て置きましたたが、丁度三十五日の日お暇が出ましたら延命院
 へ参詣にお出でになり折柄夏のこと銀打の輕興と立關へ横着お致し
 案内と諸共に本堂へ通り御拜禮が済んで客殿へ通りまそと精進物の

か料理が色々並びました下女「旦那さま少し御帯とれ取り遊ばしまし
ては如何でございますか」
「當院は御高臺だら左のみ暑くも無い女
「妾は肥満て居る爲の汗でビツシヨリお成ました誠に結構な庭で
さいませ夫おれ上人も大層に美しく在ッしやいます子あなたが役者
の丑之助お瓜二ツだと被仰いましたか本當にッツツリでございます
よ年齢も彼是アノ位お成ませうハア然うでよ夫で尊臺スーッど本
堂へ出て参りました時には丸で舞臺へ出た時のやう丑之助が何時だ
ッけ坊さんの役と爲た事が有まそが只年と取てるも若い丈の違ひで
ッツツリでその彼れは丑之助に相違有ませんよ今お急度御挨拶に
出ませうのら聽いて見やうと思つて居りますくめ「其ノな事として若
し然うあれば宜いが間違ふと悪いよ、貴僧は河原者の俳優じやアど
さいませんのと聽いて間違つたら何んどお云ひだエ女「イ、エ宜うど

さいませよ決して尊臺に御迷惑は懸けません夫は然うと旦那様が未
だ御奉公にお上りお成ら前でございますました堺町の丁子屋で丑之助
と被仰いますのら妾が夫は何んでございませよッて呼びに往つて
何ノした時に自分の扇子で有ましたのら夫共旦那さまの御扇子では
さいませんでしたの歌と詠したの旦那さまが那方へお出に成ます
にも大事にお持でございますいたが今日も矢張御持參で在つしやいま
すか「くめ大事にそると云ふ譯でも無いが一番使ひ宜いもの今日も持
て来たが何うぞるノ女「少々御拜借と、久振りで丑之助の筆と見まし
た是に相違ございません少々御拜借と願ひまして、彼の人が出来し
たら何ノと附のすに此の扇子と出して見せませ、ヌルト自分の書た
扇子おら屹度何ノと云ひませよ黙つて居れば夫迄として一ツ遣つ
て見ませう杯と二人が私語どころへエヘンくと咳拂ひと聞せるの

は上人の來たと云ふ前ふれで月代が薄く生え、麻の法衣と着し水晶の珠數と手お絡んで出て來た日當は實に露の垂るやうな好い男でくめ「何卒此方へ」日「ハイ、と慇懃に一禮し日「能うこそ今日は先達ては御前様が御遠行で嘸お力落し御愁傷で在つしやりませう、と言乍ら下女の方と向き日「今日は誠に御苦勞様女へい」種々のお料理と有難う存じませ、旦那さま何うもアノ何んですよ左様でございますよ、伺つて見ませう何んだらお上人さまに御酒と勸めるのは異なるのです、一盞位は宜うございませう日「宗旨によると葦酒山門に入る禁ず杯と申すが、貧道の宗旨では宗祖へ御酒と供る例も有ますら敢て差支は有ません一盞二盞御相手と致しませう女「旦那さまお盞とアノ妾は誠にお饒舌でございませらアノお上人さまに少し伺ひ度事がございませが日「ハイ、何んでございます女「他の旦那さまの

ら頼まれてあなたに御鑑定と願つては呉まいのと云ふ物がございます、イエ歌でございませが、チヨイと何うの恐入りますすけれ共、イエ貴僧さまに限るんで何うの御鑑定と願ひませ日「貧道は歌などの心得がございませんら一向分りませんが一寸拜見と、と扇子と手に取揚て見ると「幾年の經るてふ君の心根と何日の世おは語り分けなん」と認めて有るら首と傾むけ、幾年の經るてふ君の心根と何日の世おは語り分けなんと讀下しまして日當は急に疊へ頭と摺付け日「先刻ら御挨拶と爲やう」と存じ居りましたが若しお忘れらと考へ態と控へて居ましたが實は大立の姫さまとは篤より存じて居りました何日も御機嫌よろしく女「ソレ御覽遊ばせ物は當つて見なければ分りません丑之助さんでございませよ、音羽屋ア、オヤ失禮モウ、旦那さまと二人で貴郎のお噂計り申暮して居ましたが何うも

お變りなさいましたすね姿はお變りお成ましたが何日もお美しく在
 つしやいまして且那さま私はお庭と拜見して参りますすちヨイトく
 お納所御案内と、下女は慕とさりました跡は衆村と日當が差向ひ、
 衆村は休裁悪る氣お箱セコと捨くつて居る日「一盞お酌みくめ「ハイ深
 く御酒は戴きませんがあなたに少々伺ひ度事がございまして日「ハアく
 何ンでございますすのくめ「アハッ此扇子に幾年の経るてふ君の心根と
 何日の世にやは語り分けなんと認めて下さいました其の何日の世と
 云ふのは何日頃の事と指して被仰いましたのです日「其の扇子の歌
 でその夫は不可せ夫はあんた役者で居た折に前後と構はんで無分
 別に書いて上げたので今に成て考へまると實お夢のさめたやうな事
 で其の時分のお話は何うぞ御無用に願ひますくめ「では彼の時分の、
 役者の時分の事は虚言だと仰しやいます日「虚言と云ふ譯はござい

ませんが前後の分別も無く爲た事ですからくめ「妾は然云ふ事とも存
 じませす兄弟や親共が他家へ縁付けの智と取れのと申すのと肯入れ
 す御殿へ一生奉公と願ひました、衆村、今更お耻しうございます、
 と顔と赧め帯の間ら合口と取出しました何うも氣味の悪い事で殿
 方でも御婦人でも餘り纏綴が好いと頼でもあゝ災難と受けまとも
 で日當も衆村の様子と見て若しも此處で間違でもあつては大坂にて
 新兵衛と殺した事までが發覺やアしまいか自分は元より世棄人覺悟
 の上とは云ひながら萬一此の寺にでも障るやうな事が有ては先住お
 濟す又菊五郎の家へ瑕瑾でも附いては濟すすと進退維に谷まつたが
 釋迦でさへ次第に寄れば方便と説れたら欺をお手なしと思ひまし
 て日「只今は百日の行中もゑ行濟迄御返事の儀は御猶豫とくめ「百日は
 愚の、一生でも待ちませうが、百日経てば必ず返詞とせると云ふ何

ぞ確な証據と願ひまそと云時折よく下女が女「モウお支度と遊ばしま
 せ七面さまは大層御繁昌で入らッしやいまそ事お上人さまも彼方で
 御休息と日「大きお有難う存じます、と鱈の口と免れた心持で此方へ
 来る跡あら下女がノッく尾て参りまして女「何うも丑之助さん誠お
 暫く日「貴嬢は誰方女「忘れた、お梅でそよ日「お梅さんと云ふと女「ア
 レサ藤間のお師匠さんでお目に懸りました八丁堀の小間物商のお梅
 ですよ日「ナ、…然うく是れは御機嫌さんでした、久しく會ハね
 ー、ホニにくく得來お立派に成りやしやつたナ女「妾は貴僧様お少し
 伺ひ度事がございませぬ日「何にと女「貴郎が彼限見ぬあいで若しや
 お死ななそつたノヒやアないと思つて居ましたが當院でお目に
 懸つて此なる嬉しい事は有ませぬがアノ堺町の丁子屋の二階で旦那
 様が丑之助と、と被仰いましたのは未だ御奉公に入らつしやらない

時分でございます、妾は踊の朋輩でそのらお前さんと何んした其の
 時のお扇子と大切お持て居ますが嘘と吐ないど被仰つた是は眞實で
 する日「其んな事は投つて置きなはれ役者の折の事と今云はれては困
 る世の中の事は皆夢じや投つてお呉んなはれ女「オヤ、役者の時分
 の事は反古だと仰しやるのへエー少々伺ひますが妾共の様な陪臣の
 云ふ事は嘘お成てア、云ふ立派な旦那様の被仰る事は眞實お成りま
 そあい、エお襖越しに聴いて居ました百日経ば斯うア、お被仰いま
 したか妾の様な陪臣の云ふ事は日「マアお待なはれ女「イ、エ其んな事
 が、と聲高に言合つて居る内お玄關でお立ちい、といふ聲がするの
 ら日當も玄關迄送りお出る衆村は日當と斜に見て莞爾り笑と含む下
 女のお梅も日當と尻目お白眼で怨籠は門外へ出る折節七面様へ参
 詣の人がドヤ、と入り来るお驚き日當は居間へ駈け入りホッと息

と吐き日「ア、一得來事ぢやハア一今日は何ソタの日だらうと是も何
 ふやらの御罰と受けて居るのヤあの附の女中迄同じ様な事と愚圖く
 云ひよつてア、一未だ修行が足らソナまだアソナ者の來る處と見る
 と迂濶此の寺お居て寺に拘はるやうな事でも有ると先住お對して得
 來濟まソのら最う爲やうがゐい寧の事深山幽谷おでも隠遁と爲やう
 の知ら、と忙然腕組として考へて居まそと後の襖と開けて這入て來
 ましたは柳善と云ふ納所では元御家人で彼方此方と悪い事と爲た
 トソノ詰りが延命院の納所坊主で、到々日當と墮落させますと云ふ
 ソコく端緒

第五席

エー只今申上げました納所の柳善とく、勸めて日當に墮落とさせ
 ると梅の戸は男と違ひましてチヨロリ不義と致しまそと御婦人は受

身でげすのら堪りませソ酸味物が喰たい月經と見ないと成る自分で
 も氣が附たのら墮胎薬と服んだが中々飲薬位で墮胎るものではない
 差し薬服と爲なければ成りませソが眞逆墮胎産婆の家へ節々這入込
 ひ譯にも往のす最う五月と成て爲やうがゐいのら日當おも相談とす
 ると是も大きに當惑と致しました其處で不圖心附きましたは池上本
 門寺の傍お藤井と云ふ墮胎産婆が居ます之へ手紙と宛て梅の戸に渡
 しましたのら梅の戸は悦びで池上參詣と偽り五采と連れて八景坂迄
 來ると夏の空の油斷あり難くポツリくくと降出した雨も次第
 に忙しく成ましたので側に何様だののお堂が有ますのら夫へ駈込み
 五采二三丁行くと人家が有まそら傘の用意と爲て來ますのらと梅
 の戸と辻堂へ置いて五采は傘と買ひお行く其の内雨は次第に烈しく
 相成りザザガラくくガラくくと雷氣と催し梅の戸は一

人でマゴく爲て居るとガテくくビシリーと鼻先へ落雷しまし
 たからハツと思ひますと又辻堂の裏手へ落雷、雷公に裏と返されて
 は堪らないウーンと仰向けに反り返つた處へ、ドシく駈込で來
 たのは三島無宿の七之助と云ふ奴で池上本門寺に賭博が有るとチヲ
 リと聞いたのら暴れ込んだら幾らもの錢に成らうと行つた處が賭博
 はあく、手と空しくして歸り路、結城木綿鼠蛇形の單物は白木綿の
 ニタ重廻りの三尺と締めテツカ絞りの手拭とスットコ被りおし麻裏
 のお茶漬草履と腰に挟み裳と高く端折つて駈込で参り七ア、甚い
 く何ンでも何處に落たに違へぬエチーく是ア不可草屋根も斯
 う成ちやア往生だ少し此處とお借申ても宜うございませう不誰も居
 ぬエのの人が居なくツても構ふ事アぬエ這入らうエー御免ねエ何ン
 だ御殿女中……姉さんオイ是は往けぬい種だ爲やうが無いナ己ア斯

云ふ事に出會つた事がないのら薬は持す何にの無エの知ら御殿女中
 だのら五采が居さうな者だが誰も居ぬエのは大方傘でも借に行つた
 のだらうチーイ反つちやア往けぬエ何にしても夢中だ、ト見ると箱
 セコの巾着の隙のら手紙が見ぬるのら手に取揚てナニ藤井様へ、谷
 中より、御殿女中が藤井の處へ行くんだ誰も來ない披て見やう、ト
 讀下し驚きながら梅の戸と見返り孕んでやアがるのら姉さんオイ何
 おしても爲やうがない水でも、ア、占めた有過ぎやアがらア、ム、御免
 なせエト手拭に雨水と浸し梅の戸の口へしぼり込まんと死んだやう
 に成て居る梅の戸とグイと抱起さうとしてブラくくツと煩惱が起り
 遂に梅の戸と辱らしめました梅の戸は氣が附いて殘念で堪りません
 が愚圖く云へば七之助が手紙と以て出る處へ出る然うしたら和女
 の身の上に拘はるだらう吾儕も心得違ひのら頼でもぬい事と爲たが

お前の身も五ヶ月では迎も墮胎まい若し無理として身体でもやつて
 終つては大變だゝら吾儕のいふ事と肯て吾儕の家で身二ツに成り赤
 兒と抱いて行つて詫事と爲たら親御も一度は小言はいふだらうが勘
 辨しない事も有るまい吾儕も頓でもない心得違ひと爲たら色氣な
 して親切お出来る丈の世話とさるゝら一緒にお出で悪い事は云はな
 いゝらと云はれ否でも應でも藤井お遣る肝腎の手紙と取揚られて終
 ひましたゝら梅何分宜しう七然う成つて見ると五采の歸らん中にと
 七之助は梅の戸の手と取て赤坂の自分の家と云た處が朋友の家の二
 階と借て居まそのので之と聞き傳へ言ひ傳へて七之助野郎は旨くしや
 アがつた能く取たくと猫が鼠でも獲たやうに譽て居ましたが成程
 七之助に親身も及ばん程親切に世話とされて見ますと坊主臭い男よ
 り那方ゝと云へばステツカの男の方が宜いと思つたのゝ夫共七之助



の親切に絆されたのゝ夫婦同様に爲て居る中に間も無く産みました
のは女の見で其の年も過ぎて翌年の彼岸時分七「お梅さんく下てお
出な二階お計り居ないで上野の櫻花の大變に宜いてんだが見に行う
じやアないの坊やは吾儕が背負て行くのら梅止しませう、御殿の人
みでも會ふと不可いゝら七「大丈夫だよ少し熱いが忍耐して頭巾と被
つて行ば宜い、と云はれると氣には濟まんが斷わり兼ねて上野へ參
りましたが只今の公園地と違ひまして彼方此方と見物して谷中門と
出て乞食坂の方へ行く様子七「チヨイとくお梅さん坊は吾儕が代ら
うヤア懐へ入れたらお前と間違へて居らア、エ、くすぐつてエく
阿母ちゃんではないよ梅七さん其方へ行つちやア道が違ふよ七「違ひ
も何にも爲ない此方へ行くと大變お近いのら黙つてお出よ梅「其方へ
は行れないよ七「ナセ梅「なせだつて平生のら話と爲て居る事が有るの

ら行のれないよ七「何ある爲て有るの知らねエが宜いじやアないの黙
つてお出よッラ来た梅「往けないよ其のお寺は七「黙つてお出よ此の七
面さまが吾儕は大變な信心だチヨイとお参りと爲て行くのら黙つて
お出よエーイ黙つて来いと始て眼球と喰た梅の戸は驚き乍ら尾て来
る七「南無妙法蓮華經南無妙法蓮華經サ斯ンな事と爲て置けば宜い
だアイヨ「アレ懐と搔廻はして居やアがるお頼ウ申まそ「小僧
ド「レ那方おらお出なされた七「エー吾儕は赤坂の者でござすが七面さ
まに些少計り御寄進お附度いんで小僧「マア一寸お昇り一服召上れと
夫へ供物やお札と持て参りました七「旦那さまに何うのお目に掛り度
うございます小僧「今御來客でございますらお目に掛られんと云ふ
のも分りませんが一「遍尋ねて見ます何卒此方へお昇りアス「七「昇
ンねエ「エー誠に少ねエンですが此金と小僧「ハア「有難うござ

只今住持が御挨拶お出ませう、と興へ行て日當お此の事由と告る日
當が包みと開いて見ると千疋、當今の二圓五十錢とは違ひ其の時分
の千疋でげそのら大したもので日當も會たら宜らうと思ひましたの
ら役僧と一人連れて出て参り日「サ何うぞ此方へ能う御参詣で只今は
又七面堂再建の御寄進にお附き下されて得來御奇特な事で小僧其方
はアノ池田屋さんのお取持と爲て直出まそのらと斯う云つて置け宜
いの七「エー大層御普請がお立派に出来ましたナ昨年参りました時に
は斯ンなでもございませんでしたが大層お立派に出来ました貴僧は
お上人さんでその然うですぬイエ何に詰らん「エッボコ講中と建やう
てエンで夫や是やで旦那にお願ひ申度事が有まして實は参院タンで
ござえますイエ何お他の事ではございませんが餘まり七面さまの御
利益の有るのに驚きましたら役にア立ちませんが講中と建やうの

と思ひます御利益の有た話と爲度てエのは他じやアごせエませんが
 斯云お理由で七面さまに無理な御願とつけたので吾儕おは實子が有
 ませんのら何うのして子と欲しいと云ふので俗お謂ふ申子です七面
 さまの御利益は恐しいもので不思議ぢや有ませんの五月目で産とし
 ましたナント珍らしいじやア有ませんの夫でピン／＼強壯でげす虫
 ツ氣一ツねユんで、デまア連れて來ましたが未だ名が無エんで何ンと
 云ふ名と附て宜いんだの譯が分りません吾儕も始めての子で若し虚
 弱のつた日おア困りませのらお上人さんに名と附けてお貰ひ申した
 ら小兒も幾らの丈夫お育つたらうと斯う思ひまして嗚アと小兒とお
 近附きながら一緒に連れて來ましたが恐れながら名と附けてお貰ひ
 申度が小兒と一ツ見て遣てお呉んなさいまし好い兒ですサアお梅小
 兒と見せるんだ御挨拶と爲ねユの然う屈伏で計り居ちやア往ねへ御

免みせい斯云ふ馬鹿で、御挨拶と爲る顔と擡るんだ、と猫兒同様お
 れ梅の顔首と捕てグイと起されたお梅は耻しいので耳たぶと赤くし
 て屈伏む事が出來ませんで、ガ／＼／＼戦慄るばかり日當は心の中で
 變る事と云ふ奴と思ひましてヒヨイと見るとお梅でげそのら日當も
 驚愕して何ん共云ふ事が出來ず唇の色まで變つて眞青お成ました七
 之助はセ、ヲ笑ひ七「エへ、へ、嗚アは萬更知らんものでも有ますめ
 エ何ンてエ名が宜うごせエませう小兒の名は壯健お育ちさうな善い
 名とお上人さん一ツ考へて下さいナ旦那黙つて居たつて分らねエ何
 ンとの挨拶と爲て下せエナ柳善「エ、アノ池田屋さんでございまそが
 チヨビツとお顔と少し七「マ待て呉れオイ／＼納所少し待て呉れ今少
 しお願ひ申て居る事が有るんだ俺の用が濟む迄少し待て呉れ柳「是は
 得來御無禮然うぢやけれ強らい用でござのらチヨツと七「一寸と云

つたッて此方の用も大切なッだ柳左様なら此の柳善が代つてお話し
 爲たらよろしうございませう七何に生意氣な事と云やアがるッだ
 エ、黙つて引ッ込んでる汝等の知つてる事ぢやアねエ柔和く云つて
 居れば附上りやアがつて和尙に掛合ふ事が有て来たッだ柳掛合ふな
 ら此の柳善の方が尙の事宜のらう七黙つてる汝杯ア臺所で味噌でも
 摺てれば宜いッだ和尙の前へ迄来やアがつて胡麻まで摺りアがる黙
 つて引ッ込んでる柳吾儕は引ッ込んでは居られまへン掛合ひ事総て
 の事皆此の柳善が引受けて居ますのヤ旦那はんに云ふたッて分りま
 へン是は却てお上人では分らんら此の柳善の方が宜ありさうなも
 のと思ひまそ又ホノマに真底立腹して居やはるあら寺社奉行へ出な
 され寺院は寺社奉行の係りだのら併し女と連れて来るのら此の柳
 善がお話し爲やうと思ふて居るが柳善に話し爲たら何うやら分ら

ッの七知つてるの柳知らんで横合のら口が出せるの七ぢやア坐つ
 てる〜日「宜いな、分つたの柳宜しい向ふへお出なばれハイ〜宜
 しいお内儀さん少し庭の方でも見て来なはれ貴郎と二人にならんと
 工合が悪い分つたのオイコ茶なで持て来たら何うぢや何にの供物
 が有たやらう此方へ持て来いナ七御免あせエ吾儕は赤坂に居る七之
 助と云ふ者で柳吾儕は納所の柳善で何うぞ又此の末共お心易う願ひ
 ますエー妙な話だけれ共吾儕は吾儕丈の話と爲やそのら貴郎が夫で
 面白う無いと思ふたら其處は又其處の話に爲やうお上人が黙つて挨
 拶とせん處へ出て来て柳善が挨拶と爲やうと云ふのだからまア緩く
 り話して居な緩くりしろ〜七お前が此處へ這入て来るのらにア此
 の位は期うだど云ふ處は知て居るだらう柳何うでも話と附るのら静
 めお爲るッてンだよ然うペテ〜饒舌るやうでは好い悪黨ぢやアな

い七「ナニ生意氣な事と云ふナ柳」まアサ静かにしろイ大きき聲と出
 て言葉數と百遮利たつて役に立つ事ア一ツしろ無い一ツの釘とキチ
 ンと打てば其ノゑに饒舌ノでも宜いもンだ未だ若エせ下手過るせ忘
 れたの七「イ能く氣と沈着て俺の顔と見る七」何にと云つて居やアがる
 汝のやうな坊主に近附きはねエ柳「無エ事は無エせ然らよノ丁度二十
 一年に成るノ本所菊川町の横井と忘れたる七」違へねエ横井の御前の
 御機嫌宜しう今は當院の納所のへ道理でズツくしと思つた何
 にしろ御機嫌能くつて柳「餘り機嫌も宜くねエのヨ汝は忘れたる彼の
 時三島の大鶴屋の家へ生首と提げ汝と提灯持に連れて行きまノまと首
 尾克く千兩の金と騙り取たは宜うつたが忽ち悪事が發覺て處刑と受
 けト、の括りが延命院の納所だが困難たせ八年の九年ばり以前に
 當地へ来て故郷忘じ難しとは能く云つたもンだナ生れた處は忘れら

れねエ乞食として江戸へ来た處が手寄る人もなし仕方が無エのら乞
 食小屋に飛込で居たが懺悔で動く事が出来ねエ其の時お死ぬると
 思つたので助ありア助ありつたが揚梅瘡で面の皮が寄ツちまひ到當此
 の寺へ飛込で納所坊主よ先刻のら聽いて居れば生意氣ハマンカと
 切る奴だと思つて見ると汝だのら追歸す譯にも往のねエのら出て來
 たのだ七「お前さんは悪黨だのら話が爲よい萬事お任せ申すと仕ませ
 うが斷つて置くなア菊川町の横井甚兵衛の權式で威し付け斯うして
 置けと云ふのら知らねエが何時迄も少年ぢやア有ませんヨ三年経ば
 三才に成ますのら柳「悪まれ口と利くナ何にしる好い物と探したナ七
 「資本が悪つてまさア柳「嘘と吐けエ百兩あら宜い處だらう七」串藏云つ
 ちやア不可エ夫ア目違ひだ百兩と云ふ相場はねエ品物が固いよ柳「馬
 鹿ア云ふナ百兩遣ると云へば二百兩、二百兩遣ると云ば三百兩と何

處迄行つても果シが無エ百兩にして置け手と拍ても宜らう七長道
 ひと爲て居ればお前さんだ何んな又シツペイ反しとされるのも知れ
 ねエから宜うがす柳「兩手と出せ切餅二十五兩包と云ふ四俵持て來た
 藤井へ送つた手紙と引換だぞ七」行届いてるネ左様なら手紙と差上げ
 ますよ柳「ヨシ確に受取つたサ宜いの未だ汝ツシカの切やうが不巧
 せ最う少し稽古爲るくツちやア往けねエ下手過るせ何處に居るナニ
 赤坂の勘次の家ある又些ツと遊び來ねエナニ構ふものか此件は此
 件だ併し斷つて置くよ取られて終つた又二十兩最う三十兩てエのは
 本筋の悪黨のする事ぢやアねエ此の話は是限で薩張として終つてチ
 ヨイ〜と遊び來いメガ鬘人參見たやうな扮装で玄關の處ら横
 井さんは居ませンの甚兵衛さんは居ませンの杯と云つちやア困るせ
 お納所の柳善さまにお目に掛り度と云ふんだ七「誰の事だニ柳俺の事

よ七「ウフ、大笑ひだお前さんが柳善ウフ、矢張葬式の時おや御
 經と遣るのチ柳「廉い葬式なら引導も渡す七「浮べねエチお前さんに
 やられた死者は、今日は歸らう阿魔ア何うしたらう柳「庭お遊んで居
 るだらう今日は御馳走と爲あいよ本當に遊び來ねエ未だ面白い話
 が有るのら、コレお立ちに成るせ支度とせんの玄關まで御案内と、
 今日強らい御無禮と致しました、是ら朝早く來ちやア不可い勤
 行が有るのら其積りで七「ウフ、左様なら、何の事は無い狐お化さ
 れたやうだ、と七之助は梅の戸と連て門外へ出て見るとコケ博奕が
 やり度ッて堪りませンのら梅の戸には幾許かの小遣ひと待たして別
 ろれましたが梅の戸は二度と再たび赤坂へ歸る氣は無い親の家へは
 尙は更歸られす遂お大橋のら身と投じましたが此の死骸が上るのが
 ソロ〜悪事露見の端緒に成ります

エー戀は思案の外との申しまして戀が變じて無常とあり無常が變じて戀とあるとの申す無常が變じて戀に成ますのは誠に粹なるものですが其の粹なる事は澤山はございませぬ、先づ悪い方に變ずるが多いやうでお若い内はお遣ひ過でトの結局が上野の公園地と拜借したり或は大川の百本杭の厄介にあつたりして兎角無常と變りたがります無常の中の戀なると云ふのは精々能く行た處が御葬式の歸りに一ト晩何うだエと繰出す位のもので有ませう、却説梅の戸は延命院の門と出まして赤坂へ歸れど七之助に云はれましたが始めて七之助は斯んな悪黨のと云ふ事と知りましたが最う然うなると御殿で成長ましたものゆゑ怖くつて二度と再び赤坂へ歸る氣はあし、と云つて親の處へ我子と連ては尙更歸れず嗚呼是も不孝の罰だ死ぬより他に

思案はないと覺悟と極めました、御婦人てエものは差迫つて來ると死ぬ限の智慧しきやア出ないものと見なせど、扱歩行く氣もなく兩國橋へ懸りました頃は最う日もトツプリ暮ましたけれ共親子の情で自分の死ぬのは覺悟の上だが何科も無い生れた計りの此の子供と此の儘一緒に殺すのも不便で有る何うの小兒丈助け度と渡り掛た橋と跡へ戻りましたが現今の兩國廣小路と違ひ其の頃は彼方此方に見世物小屋杯が有ました御婦人の事ですあらお汁粉屋へ入りまして硯と借て細るに書きましたは兩親へ訃事の遺書又端書に致したのは誰様でも此子と拾ひ揚げて何うぞ此の兒の祖父斯々斯云ふ處へ御送り届け下されど我親の宿所と書きしるして巾着の紐に結付け眞鍋河岸へ係りましたが現今は大きに開けまして花井お梅が出刃庖丁と廻振はした本舞臺に成りましたが其の頃は一方は土堀此方は大川で折柄鼻と摘

まれても知れンやうな眞の闇四邊と見ると人の足音も爲みい様子と
 幸ひと袂の尻當と出して塀の脇にヒタリと敷いて赤兒と自分の半
 纏の何おるに包んで尻當の上に寐のすと虫が知らそかオギアと
 火の附くやうに泣のら抱上げて動揺ると又スヤ／＼寝付く折柄其處
 と通懸りました人が男「ホー何ンだエ其處に居るのは、誰の居のらエ
 其處に、アノ驚愕りした居るゑら居ると聲と掛て呉れ聞所お赤ン坊
 の泣聲なんぞ氣味が悪い然うしてお内儀さん何と爲て居るンだ其處
 に屈身で梅「只今小便とやつて居ます、お構ひあさいますナ男「小便か
 エ小便杯とやるゑら斯ンな淋しい處でやらなくツても最と明るい處
 でやるが宜い灯火と見せると小兒は悦んで小便とするものだ眞暗な
 處でやるのはお止しあさい一休何處へ行くのです今時分斯ンな處と
 婦人一人で淋しいヤ何處へ行きあさる梅「エー靈岸島迄参ります男「靈

岸島、靈岸島は何處へお出なさるのだエ梅「湊町と申す所で男「湊町
 誰の家へ梅「小間物屋源助の家へ参ります男「ウン源助さん彼處の家へ
 行くのらエ其奴ア有難い吾儕も彼方へ行くもンだ宜い道連れが出来
 て助のつた吾儕も靈岸島湊町へ行く者だよ、源助さんの家へ行くの
 らエ梅「貴公は源助と御存じで男「知て居るとも吾儕の店子だ吾儕はあ
 るこの家主で梅「達者で居まその源助は男「達者でげと共併し爺さんは
 去年頃からメツキリ衰弱ましたよ何にしる其處おしやがんでても爲
 やうがない早くお出なさいサア往させう其奴ア有難い道連れが出来
 来て助のりましたナニ吾儕は本所迄用が有て行つた歸り掛け元柳橋
 迄來ると子同伴が向ふへ行つちまつたゑら跡へ歸るのも大變だし提
 灯と渡したゑら持て來たが蠟燭が無く成ちまつたゑら小田原と袂へ
 入れ草履で飛んで來ると赤兒の聲で驚愕りしたのだ何おしるマア道

連れが出来て何より有がたいアノ源助さんも娘が一人有て駒込との
 のお旗本へお前さん小間使ひお上つた處が其家のお姫さんとの云ふ
 のだらふ其のお姫さんがお城へ上るに就て當人もついで上つた處が
 池上とやらへお参りお行つた途中何んどの云ふ處で雨が降て来て詮
 方が無いから其の娘丈辻堂へ置いて五采が傘と買に行き歸て見ると
 其の娘が何處へお行つちまつたてエのだが何うしたのだ、チツ共
 譯が分ら無エ梅アノウ誠に濟みませんが彼所らで夾囊と落しました
 ろら探して参り度うございますのら此兒と少しお抱きなすつては下
 さいますまい、男赤坊の宜うがすサお出しなさいウフ、吾儕
 の顔と撫て居る懐へ入て上げやうウー寒冷たいイヤ是は寒冷てエ、
 ぢやア早く行てお出なさい斯やつて預つてるのらウーくそぐつ
 てエ阿母ちやんではないよ叔父ちやんだよ今直に阿母は来るよと云

乍ら不審さうにお梅の行手と見送り男オ姉さん其方へ行ては違ふ
 よ其方へ行くよ大橋だせアイよく今直に阿母ちやんが来るよ其方
 へ行ちやア橋だよ此方で落したものと彼方へ拾ひに行く事はあら
 うおアイよく阿母ちやんは今直に来るよア、ア、飛込んだ是は驚い
 たオイまア泣く處ぢやアねエ俺が泣くならア、なんだつてアんな
 事と爲たんだらう何おしる橋の上へ行て見やうと大橋の上へ飛んで
 行くよ女の下駄が一足脱棄て有まそ男エーまア情けない話だ泣なさ
 ンなよお前より俺が泣たく成た救助船はなしマア何んな婦人だつた
 ろ真闇で顔は發輝り見えなつたが何しる源助の處へ行くといつた
 ろら源助の知り人に違ひ無い源助に聞たら分らうと思ひましたのら
 家主はセッセと急いで家へ歸つて参り源助に此の事と咄しますと源
 助は夫では御屋敷の若しやお姫さまでは有るまいのと何しる覺悟の

入水と思はれますら小兒の守袋と改めると中には書置が有つて親の方迄小兒と届けて呉れと細々認めて有ました直小手分といたし一方は巢鴨の梅の戸の親元へ知らせ一方は助け船と出して方々尋ねました梅の戸の死骸は何處と何う流れたものか皆目知ません又子供は巢鴨の屋敷から使ひが来て受取て參つたと申そとであり升お話し替つて彼の七之助は延命院で百兩の金子と取ましたか途で虚氣博奕ふ係つてハタ／＼取られちまひ二十兩残つた金と持て本所五ツ目の五百羅漢の小屋に博奕が有ると聞いて之へ參つて手と出しましたか明方までおとう／＼奇麗に取られて終ひ爲方なく襪一枚着て小用に行くともウ東がホソノリ白ソダ頃でございませと手と洗ひながら向ふと見ると夜干ふ成て居る婦人の着物七之助は何おの心に思ふ處でも有ますらして七親方男「イヤ兄いさんお小用で大層昨夜は出来が悪

うございませしたナ七爲方がない賭博は宜い事も有り悪い事も有るから明方に寺口と持てと小屋の老父が色々心配して呉れたが彼處に着物か夜干に成てるが彼は何ンでげす男「兄いさんお頼でも無いものに見られましたナ七何ンでげすエ彼は男「イエお客さまの七女の客有るのへ男「イエお客さままでエ、是は吾儕共の餘祿なソで七夜干しに成て居ますナ男「左様でがす七親方下駄と少し貸てお呉れ、と下駄と借りて彼の着物と見て七「今見たやうな親方此品ツ切です男「イエ、エ本國の帯がございます幅は狭うございませが丸帯で夫に長襦袢がございませ七「幾才位でございませたらう男「左様サ能は分りませんでしたかエー二十七八と云ふ處でございませうナ七「何日です男「昨日の夕方此の渡場で係りました七「小供は居やア爲ませんでしたの男「御検視の被仰るには何んでも小兒が有るお相違ないつテ抱いては居

ませんでした乳が張て居ましたよ乳首が黒く成て居ましたら小
 児が有るに相違ないが可哀想な事で好い女で有ましたが今日の陽氣
 にしちやア浮くのが早いなんて被仰つたでございませ七「ウム此の渡
 場です男左様ですの兄イさん貴郎はお掛合ひでその今の内あら投
 込みになンしてございませすが帯と持て参りませいゝ七「ナニ宜しうご
 さいませと大きお有難う誠にお氣の毒さまでそが少し他所で金と算
 段して來なければありませン吾儕に寺口と爲るナンツ言ひますの
 ら一寸往つて來ますが若し七は何うしたと聽たらチヨツと其處まで
 用達に行たと云つて下せませし男「まア御膳でも七「イニ何に飯は喰た
 くない男「ぢやア握飯でもむすびませうの七「ナニ宜うごせませす一寸
 行て來ませらら頼ノ申ます……サア困つた氣の小量奴だら投身
 アがつたに違へねへ失策つたナ赤坂まで連れて歸れば宜うつたンだ

がお梅の摺子木に相違ないが女お未練はちつ共無いが根が愚痴ッば
 い奴だから遺書とか何とか云ふ變的箇なものが送り處が惡いつた日
 にやア江戸には居られねエ夫にしるヌツテンテレッツクでは爲やうが
 無い金の算段は出來あし露月町に居る阿母の處へもさうく無心
 には往す困つたあア差詰め行のは延命院はありだ尤も此の間百兩貰
 つて歸る時に柳善の摺子木めが此の先二十兩三十兩と無心お來るの
 は本當の悪黨でないら此の話は是切として薩張した扮装と爲て來
 いと云つたらら容易な事ぢやア金は出せめエナ嗚呼困つた併し因縁の
 無い處へ係る事も出來ねエエ一若しも間違たら地團太と踏むとして
 往て見やう、と开處でセツセと延命院へ來と丁度今門の開た計りの
 處で夫の案内と以て柳善に會ひませとケンモホロ、の挨拶とされ
 るお話し一寸ト息繼まして

第七席

延命院では今門の開た計りの處七「お頼ッ申まそ 小僧「ドール、ハイお
 出なさい那方「お出なされた七「エーお納所の柳善さんはお目盛に
 成ましたる 小僧「何ぞ御用でそ七「赤坂の七「エ者「柳善さんお少し
 お目お係り度で参りましたがお取次となすッて 小僧「待て居なはれ、
 アノ柳善さん「柳「何ぢやいな 小僧「エー赤坂のら七「云ふ者が見え
 られて貴公にお目お係り度とッて玄關に居なはりますが此方へ通し
 ても大事をわせんの柳「お人はいナ 小僧「ハア柳「お一ト方の 小僧「ハア一
 人「ナンでそ柳「左様の客間の方へ案内せエ 小僧「彼男と客間へは連立て
 は往まへン汚ない着物と着て居るはる扮装が悪いのて、甚い襦袢の
 肩も何も扱て終つた着物と着て居ますがナ柳「阿房云へ汚ない着物と
 着て居たつて好い着物と着て居たつて又なア夫程でも無い人が幾ら

も有ものや其な事と云ソでナ丁寧にせエよ柳善が只今御挨拶と致ま
 するッて向ふへ御案内とせエ 小僧「ハア、と此方へ参り 小僧「貴郎此方へ
 昇「なはれ一服召上れ只今柳善が御挨拶と致しますら、七「何卒一ッ
 宜しく被仰つて 柳「ア、袋と片附て置よ米の、底が破けてるのらホロ
 〱 翻「さんやうにして置け旦那はんが柳善は何したと尋ねられたら
 何やら用向が有て來客とすと云て貴様此方へ來るよ強い烟草盃が無
 いせ七「有んだ〱 股倉へ入て有んだ柳「有た〱 最う宜々其事と爲
 ては不可ン七「寒くッて為様が無る柳「汚ない着物と着て來たるア茶
 番の七「茶番處ぢやアない眞實だ何にも斯ふも為様がねエ 柳「先度も云
 て置た通り寺へ來ても大事無いけ共勇の扮装やノ、テツカの扮装と
 爲て來ては不可ンぞと云て置たに何で其汚い着物と着て來た七「ス
 ッテンテレッツッお取れちまつたので 柳「為様が無なア到底碌な事ぢや

ア無らう七被仰る通り碌な事ぢやアない誠に濟ませんが忙しい身分に成て江戸に居れませんツケあつくちやア成ねエが爲様がねエ握拳で何する事も出来ねエンで噂アの處へ行譯にも往ず赤坂の治郎だつて彼の通だの爲様がない何の三十兩計りお呉なさいナ、エ何のして柳何のせよと云て何するのだ七金とチ柳阿房云へ金杯は有アヘンがナ七申戲云ちやア往ねエ有やヘンがナと云たつて何のしてお呉なさい柳有は何でもするが無がナ七金は無たつて和尚さんに云てお呉ねエナ柳旦那にも云れんがナ能う物と積つて考へて見イ吾儕に其様な事は云ンがナ過日の百兩は何したのヤ七取れちやッたんだよ柳取れたのは貴様が不注意のヤ汚い着物と着て来て過日の百兩は取れたてエますら又しても何卒三十兩遣てお呉んあはれエと其な阿房らしい事と年と取た此柳善が云れるの云れ無の能物と積つて考へて見イ有は

間に合せて遣るが無ものと問合せが附ンがナ七申戲云ちやア往のねエ柳申戲だつて此柳善が帳の締括りと爲て居るのら金が有る無い位は分て居る全く無がナ無い物と遣る事は出来無のら何卒他家で間に合せて置いて呉んの本堂の再建も斯遣て出来掛て居るのら、大工にも夫丈の拂せんければ成ン夫ヤ是ヤで彼方此方から來のと待て居る位の者だか夫で出来ない神に献る金だつて出来ノのに貴様に遣る金が何で出来る者の七然うだらうが其處と御頼ウ申で吾儕だつて本當に取れちまつて江戸に居られませんに何處へ行くおしる金が無ちやア墓に化するが踏金お化するの知らないが何のしてお呉んなさいナ柳有は何でもして遣が七其事は先刻のら幾度も聽て居る最う聞き度ない夫ぢやア何しても出来ません柳出来ない今の處では心當りが無いもの七ぢやア一緒に往てお呉ねエ和尚さんに會う柳旦那はんに

云なら吾儕云へまア静かにせよ何んの爲か吾儕が間に這入て居る
云ふ事が有るあら吾儕に云へ七「當り前だ三十兩位の金と貰て呉たッ
て宜らう柳「宜らうのてッて先度も百兩七「何だ百兩ばり彼の時も百
兩計りの金で歸るンぢやアねエ玉は確なンだ確なンだけれ共お前さん
が横のら這入て愚圖く云ふのら往時はお前さんの部屋に假寝て
厄介に成た事も有るのらお前さんと一ッ好い男に爲るくッちやア成
ねエと思ふのら黙つて百兩で食たの時々二十兩の三十兩宛も借や
うと思ふのらお前さんの顔と立たンだ當前よ百兩位の金は何ンだ貰
つたッて何にも不思議は無エ困らンけりやア來やアしませンが困る
のら頼むンでお前さんぢやア話分らんから吾儕はお上人に會て話
と爲やう柳「其んな事と云ふたのッて無茶苦茶ヤ眞實お間に合ンのヤ
七「間合ンくたッて吾儕だッて何も無理と云やアしませン柳「チヨ

ッ難儀な奴ヤ静かにせよ若し他へ聽えると不可い七「不可いと思ふな
ら三十兩の金と何のしてお呉ねエナ柳「何のせエと云たッて有ら
るが無のら出來ンのヤ七「ママ其な事と云ふ柳「難儀な奴ヤナまア静に
せエ三十兩の金はナ難儀な奴ヤナ爲様がない何ぞ爲やう七「エ何のし
てお呉あさるエ柳「何の爲やうと云たのッて今が今茲に有ヤヘンがナ
七「ぢやナ何日頃だエ柳「斯ッて斯爲やう明日迄待ンの只ッ一日ヤ待て
るやらうナ明日迄と云のは本所の方のら一寸金の來る事が有のら吾
儕は是のら先方へ行て見やうイヤ今日は行れンナ法事が有て工合が
悪いが夕方法事と果して先方さんへ行く、宜いの先方へ行て先方さ
んで到底一泊せんければ成んのら斯爲やう明日向島の武藏屋で待て
呉んの

第八席

「其處で金と渡さうじやアあいの何や七」吾儕は今要ンだけれ共宜う御坐エ升一日位詮方がねエ何時に往ませう柳「何時だッて到底法事と濟して終つて先さんへ往のは今日の申刻、宵ふ成やらうナ先方で到底一泊さして貰て朝行くら朝は何程早うても大事あひ七「ぢやア急度往く左様なら、と延命院と飛出して終日何處とまごつき七「向島へ行たッて何せ居る氣遣へはないが居なければ今度は大放言に放言てやるエー御免なさい下女「入ッしやいまし七「まア少し待てお呉ンあさい坊さんは来て居やア爲ませんら下女「ハイお寺様ですらお同伴様でアノヘエエ在ッしやいまし七「何時來ました下女「先刻のら七「馬鹿に早く來たナア其席へ連れてッてお呉れ内儀「お連れさまですかコレ履物と、向ふの離室へ御案内と七「ハイ御免なせエ柳「ヤアえらい遅いなア最う先刻のら來て居るナ「燭と直さんでも宜い此方で燭と

して飲むのら膳と持て來てマ、宜し七「其の膳と先方さんへ供てナニ河岸は未だ戻らソ戻つてのらで宜いお前は向ふへ行つてお呉ンなはれ用が有たら掌と拍つのら誰も此處へ來よらんやうおサア七、膳お着け七「有難う大層早く膳が來た子ナニ先刻のら、然うでげすの夫リア濟みませぬ大きい盃で戴させう酒と飲ねエと戰慄が止らんらナニ其ンなにやア飲めぬい實は未だ來やアしめエと思ひましたお前さんは矢張腥ぐさ物と喰るのニ柳「偶ふはあア七「腥ぐさも喰つて婦人と引摺り込むあんテ蕩樂だ子時に金は何うするンだマ徳利と此方へお呉ンなさい金は何うだエ七「金は出來ましたらエ柳「まア宜い然う金々ど云ふナ其ンなお急のつて宜い緩くり爲る七「緩くり七と云たつて愚圖くして居られるものじやアねエ早く貰ふ物は貰つてのら安心して飲み度い俺は他國へ亡命るンだよ柳「まア宜い斯う遣

て居る内ふ河岸が戻つて来る河岸が戻つて来てゐらして其の何んだ
誑物と喰て支度が出来てゐら立派な話して爲やう七「喰物は三才の時
ゐら喰てる金の方が先棒だ柳三才ゐら喰て居たの七才の時ゐら喰て
居たの知らんが喰納めに酒や肴と喰ふ丈喰つて置いたら宜ゐらう實
は何うしても金は出来ねへんだ彼方此方と尋ねたが金てへものは些
とも出来ねへ汝に遣る金は百も無い渠に棄る錢は有ても汝に遣る錢
は百も無い昨日餘ッ程此の事と寺で云はうと思つたが客でも来て居
ると面倒臭いゐら彼の儘スンナリと歸してやつたが實は今日此處ま
で汝と引出して金は出来ねエ土手へ出る金は延金で遣るといつたや
うな思な演劇とするんだが十往時なら知らん事今は其んゐ事も出来
めゑが若し一文も出来ないと云たら七、手前何うとるエナ一出来
ければ何うする餘まり悪休が過るせ少し前後と見て物と云へ悪い事

と爲たッて少しは義理人情の有るものだ餘まり分らねエ摺子木じや
アねエ此の間百兩の金と汝に渡した時お何んと云つた汝だゐら百
兩の金と渡してやるが此の話は是ッ限り流れ川で尻と洗つたやうお
薩張にして置け又二十兩又三十兩お呉んなさいてへのは眞の悪黨お
ねエ事だ此の癖は是限にしるよと云つた舌の根の未だ乾はゐねエ内
お來やアがつたッて一文も遣れるものゝ、坊主が婦人と抱て寝たら
何う爲たんだ高が女犯だ夫より汝の方は餘程甚い云はば強談だ出る
處ろへ出て對論うじやアないの茲等は最う御年貢の上納時だ絹糸見
たやうに細つた首と何日までもッ附て置いたッて爲やうがゐい汝
は三島で千兩の金と詐取たのが彼が悪事の始まり夫も俺が教へて遣
つたんだお師匠さんお向つて生意氣ゐ事と吐しやアがる然らう俺と虚
氣にするナ何程俺が年と取たッて大概にしるスツカリ支度はして有

る汝の支度が宜ければ直に出掛ける、ダガ一トツ断つて置く、汝は
 持込みだぞ俺は元の菊川町の横井甚兵衛と稱つて出れば揚屋は立
 はねエが旨く往けばね坐敷調へ押縁と喰ねエやうに爲る夫丈慈悲に
 云つて置いてやるビク／＼とるねエ能く考へて見る其の間扱けな
 事と云つて来て汝だつて夫程の奴でもなつたが七、夫だつてお梅が
 死んで柳「嘘と吐け／＼」籠ンめエ彼の婦人が死去るもの嘘と吐け百
 兩の金が餘まり無くなりやうが早エ七、早エたつてお梅と寺の門で分
 れちまひコケ博奕に引ッ掛つて裸体ノ坊に取られちまつたンで柳「お
 梅が死去つたてへ事が何うして知れたンだ七」夫は昨日の朝五百羅漢
 の賭場へ往て悉皆り負けて夜明方小便に行くと婦人の着物が夜乾に
 成て乾して有るら灯火と借て見るとろつくり夫に相違無エヒヤア
 ねエの愚痴ッばい婦人だのら遺書でも有て投込み處が悪けりやア注

戸ふは居られねエのら小隠れとするのに三拾兩の金と借やうと思つ
 て柳「夫で来たののアハ、ハ、ハ、七」笑ひ事ぢやアねエ柳「面でも洗つて来
 い意氣地のねエ餘り意氣地が無さ過るナ夫式の事でビク／＼騒ぐ奴
 も無エもンだ餘り意氣地が無さ過るじやアねエの只何にの夫で何處
 へ亡命るのの金が要るのの七、然らよ柳「路金だナ七」然らよ柳「三十兩の
 金と汝に遣つたにしろ其の金と持て汝は何處へ行くンだ、エ何處へ
 行くンだよ七」何處えと云ふ目的は無エんで吾儕はまア奥州へでも行
 つて見やうと思ふ柳「奥州へ汝行くよと云ふのの串藏じやアねエせ跡の
 ら追駈けられるんじやア有るめエし落着く先も分らん處ろへ行くの
 に三十兩計りの金と持て行けるもの百兩の金でさへ江戸に居たッ
 て三日の四日で無くなつちまつたじやアねエの田舎へ出ると云ふに
 三十兩計りの金と持て何處へ行れる意氣地の無エ奴メ未だ七、汝は

人ト殺さねエナ七「其んな事ト遣るものゝ柳」到底悪い事ト爲るなら人
 ト殺す迄やれ人ト殺すとズーイと度胸の沈静くもンだやらない酒
 落もンふ七「洒落ホカホカ人ト殺したッて爲やうが無いヒヤアねエ
 の柳」イヤ本當にやるなれば已が宜い處ろへ世話と爲てやる何うだ行
 く氣は無エの七「行く氣が無いッて何處へ柳」些と抹香臭いが忍耐ト
 する七「谷中の寺の柳」馬鹿ア云へ七「ぢやア何處柳」下總の西蓮沼村に法
 蓮寺と云ふ道場が有る七「聞いた事の有る名前だナ其の法蓮寺に此の
 節蓮華往生が有るてへが有難エもンだッて子蓮華の花の上へ人間が
 乗つて周圍でお經と誦ると樂々往生が出来ると子豪氣もンだ子柳
 馬鹿ア云へ何にも知らン奴とは云ひあがら餘り分らる過る日蓮と云
 ふ上人は人ト助ける爲めに難行苦業となさつたのだ人ト殺す爲め
 したのヒヤアねエ其んな馬鹿氣た人ヒヤアねエ彼は皆な拵へもんで

ナ赤坂今井谷の大道寺善右衛門の手の奴等々何でも藤助寛助勘兵衛
 長公どの云たッけ皆ナ大道寺の部屋おころがつて居た奴等でエー何
 日の事だッけ俺と尋ねて来て段々と話の末西蓮沼の法蓮寺が無住に
 成て居るが大道寺は少し讀るだらう年輩も丁度宜いらッて此奴
 ト間に合せお法蓮寺へ投り込んで錢取りと仕やうと思ふが何うだと
 言ふら段々其仕方と聞くと蓮華の花と拵へ其上へ人ト載けて引導
 と渡し此の世の極樂往生とさせるといつたら近村の爺媪が樂々往
 生が出来るあらば幾らでも進まそら殺して下さいましと遣つて來
 るお違ひあいといふら夫りや面白あらう一番遣つて見なさいと俺
 が返事ト仕た事があつた夫ら彼奴等が鍛冶職に鐵で蓮華と造らせ
 金箔と塗て爺媪と其の上に載け合掌と組せ蓮華の花辨と一枚づゝめ
 めて詰り身体と縛られたやうにして其處で周圍ではドンチャン鉦太

鼓と叩き蓮華の花の穴の下ゝら焼き槍で尻の穴と突つ通すんだ七へ
 エー惨酷事とぞるんだ子夫じやア突つ殺そんだ柳「然うよ七」夫じやア
 法華でなくても死なれらア柳「當然よ其の人殺しの手傳ひに行ゐねエ
 の七」やらうく柳「やるゐる七」やるゐるく「マガ矢鱈に行たつて這入れ
 めエ柳「矢鱈には這入れねエ此の割印の手紙と持て延命院の柳善さん
 ろら貰つて参りましたお上人さんにお目に懸り度御坐いますと斯う
 云へ七」其奴ア有難エ直ぐ行ゐる何れ彼方へ落着き次第何にするゐら
 幾らゐる呉ンなせエナ柳「なくたつて宜ゐらう七」宜いたつて路金も要
 るし身装だつて極めて行き度イヤ柳「何の言ひさへそりや直に金々と
 言やアがる七」でも一文も無エもの早晚に返します柳「嘘と吐け仕方が
 ねエ、ソラ二分七」二分七やア行れねエ何がしてお呉ンあさいナ柳
 アハ、夫は戯言だ十兩やる七」十兩有れば結構だ柳「又一時に消費て

パツパと氣前と見せるな暖けへ飯でも喰て直お是れゐら往け七「イエ
 吾儕は途中で遣る柳「夫が悪いまア飯と食て行け其の内河岸が歸るゐ
 ら御飯でも喰て七」ナニ止う、と七之助は柳善より十兩の金お手紙と
 一本貰つて武藏屋と出まして途中で身装と拵へましたが人の性は善
 なるものでフト芝の露月町お居る母のお町の事と思ひ出しました此
 のお町といふは七十二に成まして小金と貸付けて居ますが便りに思
 ふ悴は此んな身持だゐら平生苦勞と仕抜いて居る事と聞いて居るゐ
 ら責めて柔和い言葉でもおけ幾らゐる小遣と遣つて行うといふ氣にな
 り途中で土産物と買てお町の方へ往て見ると貸店の札が貼つて有る
 段々聞けば家と仕舞つて下総の西蓮沼へ蓮華往生と爲お行つたと聽
 いて大いに驚き西蓮沼へ駈付て参つたがモウ間に合なつたゐら七
 之助は遠お寺社御奉行脇坂淡路守さまへ駈込み訴訟お及びました

第九席

エー此の宗教の隆盛する時といふは恐しいもので日本へ渡りましたれ
 宗旨の中で佛教位能く弘まつたものは無い何んな山國へ参りました
 も佛壇の無い家は有ませんお釋迦さまは旨い物とお弘めに成ました
 もので其の中で一番後で弘まつたのは日蓮宗で誠に陽氣お宗旨で
 げす其の中で幾派にも分れて居ます内に富士派法華と申ます一派の
 谷中延命院の日當と云ふ坊さんの墮落一件と下總西蓮沼の法蓮寺で
 蓮華往生といふ残酷極まる事と致しましたのと寺社御奉行脇坂淡路
 守様がお調上げに成りましたが日當といふ坊さんが多く引入た御殿
 女中の内お御城女中が大分交つて居ります是は七面堂のお籠りだの
 鬼子母神の参詣だのと披露して参つては日當と通じ合ひましたので
 此の延命院の七面さまは水中の出現だとも申し或は日蓮の自作だと

も申します延命院取潰しの時に上野へお預けお成ましたさうでげす
 彼の蓮華往生も最初おら人と殺す結構で爲た譯では無いが一体悪い
 事といふものは他おらさせるものでげそ誠にいけあゝいもので盗賊も
 其通り此方で爲せて遣るもの、たとへば門と無用心に開けて置いた
 り何んのすると巡查の旦那方が来て門が開いて居るおら締たら宜ろ
 うと御注意が有ても何うおそると分らん人が有つて締めやうと締め
 まいと俺の勝手だ餘計な世話と焼いてるなんテ口小言と云はあゝ限
 はないが戸杯と開けて置きますとフツ／＼と出来心で金盃の一ツも
 提て行き度やうお事が出来るんだおら盗賊は此方で拵へるやうなも
 のでげそ其處でお話しがチト跡戻りとするやうでげそが彼の蓮華往
 生も最初は死人と逆の花の上に載せて引導と渡ると此の世おら極樂
 往生と爲たやうで宜らうと云ふので始めたのが近村の金満家の爺

媼がモウ婆婆もあさくしたるら一層法華經の功力で殺して下さい
 まし金は幾らも出しまするを云ふ途方もあいな人間が現はれて来た
 ので慾の深い山師共は堪らなくなり夫ら一ト趣向致しましたので
 之に加擔と致しましたのは三田の日總寺、谷中の感應寺で送鑑と渡
 しまそ尤も五十以上のものでなければ此の鑑札と渡さんと云ふ極り
 ださうです扱て七之助は延命院の納所柳善のら割印の捺つた手紙と
 貰つて直へ行けば宜うつたが露月町の母親の家へ一寸暇乞として行
 くど戸が締つて貸札が張て有ますのら家主の家へ参り七御免なさい
 く伯父さん在宅でげその家主誰方でげす七大きに御無沙汰と致し
 ました七です家主「イヤ七坊の昇んな昇んな此方へ昇んなよ婆さん裏
 の老母の處の七が来たよ婆」オヤ七之助の「七御機嫌宜う大變御無沙
 汰と爲ました家主大層立派に成たナ昨日なら母親に會たがまア

此方へ來ナ今迄何處へ行て居た七「エ田舎へ行て居ました家主「か前は
 些ども音信と爲ねエもんだのら母親が大變心配して居たがフツと田
 舎へ行く事になつたので若し七が來ましたら斯うく云て呉れと云
 て阿母が種々な言傳として田舎へ引ッ込んだ七「エ田舎へ家主「ナニ
 下總へ行くと云つたよ婆」オヤお出なさい何時も變つた事が無くて七
 「大きに御無沙汰と致しました田舎の方へ仕事に行つてナニ今朝當地
 へ歸つて來て又下總の方へ長エ仕事に行ななければならねエので阿
 母に逢へるの逢ねエの知れねエのら暇乞ひ乍ら小遣ひでも遣うと思
 つて來ると戸が締つて貸店の札が貼て有るのら當家で聞いたら分る
 だらうと思つて來ました婆」オヤく然うのへ阿母さんが平生大層心
 配してねか前最う幾オふ成だオヤく然うのへ早いものだ子立派
 な若イ衆ふ成たよ子供の時分は惡戯で爲やうがなかつたッけ神明さ

まへ行つてお賽銭箱へ蟹と投込んでお賽銭と狭ましたりなんぞしたも
 んだのら阿母さんが甚く心配して居たが阿母さんは田舎の方へ行
 つてね伯父さんにも聞いたらうがお前の友達の嘶だつてお前が赤坂
 の方に居る事と阿母さんが聞いていろくと尋ねたが知れないのら
 何うせ遇へないものと断念て参ります若し七が来たら遣つて呉れ
 つて手紙と置いて行きなつたがお前も辛抱しなければ往けあいや
 七へエ芳さんは婆宅の芳にも困り切るよ此の節品川の詰ら女郎に
 引ッ掛つて欺されたんだよ石町の伯父さんお色々意見も云はれたが
 馬の耳お風で、此の間も伯父さんの着物と擔ぎ出して家主然うセラ
 く饒舌なさん十可哀想お七は手と突いたッ切だ止せば宜いに俺
 の處杯へ、ム、然うの七が土産と婆折角の何んだがお止しあされば
 宜いに七へエおつるアは下総へ往きましたの家主然うよ七然うでせ

う三島へ行れる氣遣ひはあいら家主誰の下総の方に知て居るもの
 でも有るのら、やつと思ひ出した阿母が不世帯と仕舞ふ時金と十
 兩お前に遣つて呉つて手紙と一緒に私が預つて居る夫れお阿母が呉
 れる頼んで往つたよ七之助が来たら私おら能く意見として何時まで
 もゴロツチャヤやつて、は為やうがないのら十兩の小遣はやるけれ
 共之と消費ちまはぬ内に世帯と持ち女房も持て早く身と固めあけれ
 ば不可い吾儕は取る年で餘命の無いものだからつて呉々阿母さんが
 頼んだよ氣と附なければならぬよ本統お若エ中は二度は無いと云ふ
 が宅の野郎も然うだが本當にね前恭順く為なければ不可いよ婆さん
 金と出して遣う筆筒の小抽斗お用筆筒の鍵が有る手紙も一緒に在
 るから持て来なヨシ、持て来たの辛抱しなよ是は手紙是は金だ
 七へエ反對だ吾儕が母親に小遣でも遣らうと思つたのが此方で貰ふ

やうに成た家主「まア手紙と披けて見な七」へ下総の何處へ行たので
 せう家主「何處だの落着き次第御沙汰と致すと斯云ふ話したといはれ
 て七之助は手紙と手に取揚げ披いて見て驚愕りしたは手紙の文言で
 私もモウ七十に成るが便りに思ふ子は無しフツ／＼世の中も倦果た
 に依て三田の日総寺のら送鑑と貰つて吾儕は下総西蓮沼の法蓮寺へ
 行き蓮華往生として死ぬら、と云ふ手跡でげすのら七「ナ何んです
 ろ何日立ましたの」家主「何んだつたノウ昨日の夕方行たッけノウ何
 うのなつたの」行た先が七「大きに有難う左様なら、と言捨て飛出し
 萬一と思つて三田の日総寺へ行て聽いて見ますと送り鑑と一昨日渡
 したと云ひまのら驚いてセッセと下総の西蓮沼村へ遣つて來まし
 たが畦道は分りません田舎で道程と聽くのは難儀あもので田舎の方
 は親切な物と教へて呉まのら餘り親切過ぎて尙分りません七「少々物

と何ひ度う御坐いまそ西蓮沼村は何處に成ませう男「蓮沼は此處で七
 「法蓮寺と云ふれ寺は男「夫は此の盡頭に成やそ是のらは道が少し覺え
 難いのも知んねエが眞直にお出なせエ眞直に北の方と指して行て突
 當りやとと南側に巨大樹の樹が有りやす夫と右小見て西の方へ曲つ
 てアレでも幅の廣い處と然うさねアレテ十町許りも行きやすと西の
 方に棒杭が立て居やすのら夫お就て右へ曲つて塀へ突當ると云ふと
 地藏さまが立て居やそ鼻の欠た地藏さまよ其の地藏さまの左の方
 法蓮寺さまの門が見えやすナニ直でげすよ分りましたの」七「へエ分
 りません西だの東だのと云はずに其の鼻の欠てる地藏さま迄餘ッ程
 有まその男「然うさそ其處迄半里も有るべイ七「勝手小爲やアがれとス
 タ／＼出掛けて行きますと後がら鼻クツの乞食体の者がフガフガ聲
 にて乞食「オイ／＼オイ吾儕が分るの七「ナニ言やアがる己ア乞食に要

は無エが汝法蓮寺と知て居るの 乞食「お前吾儕と忘れちまつたの七」誰だ乞食「吾儕は今井谷に居た武助と忘れたの七」武助「おちヨク」汚ねエ面お成たなア何う爲たんだ武「何うも斯うも無エ腰が脱て鼻があく成ちまつて爲やうがねエ七」汝は當地へ来て居るの武「當時は法蓮寺さまのね弟子お成て頭と圓めて首へ頭院と掛けて斯うやつて居るが悪い事は悉皆り止めちまつた七」嘘と吐け汝は悪事と止めるやうな奴じやアねエ嘘と吐け土地とのふらん内は止められるもの 武「身休が壯健なれば如何だの知らんが此の通り腰は脱ちまひ鼻は無く成ちまつて爲やうかない夫處じやアない夫でも有難い事おは正直にして居れば通り係りの者が幾らる錢と呉るんで夫で斯う遣て居るが法蓮寺の和尚さまが可愛がつて眼と懸けて下さるので是が爲めに斯う遣て居るのよ何うして此の節は何んでも堅氣お成らんでは不可いよ

七「何おと異見がましい事と云やアがる汝に道と聞いたら分らうが法蓮寺と云ふ寺まで餘程有るの 武「ナニ直だ真直お向へ行く曲る」だ七「情け無エな是迄さへ言葉の分らん奴だ鼻が欠たのら尙分らあく成たモット沈靜て云うて呉れ西だノ東だノと云ふの嫌つて沈靜て云つて呉れ 武「真直に突當つて左の方へ曲つて右側と見ると一イニウ三ツ目の七」ナニ武「三ツ目の幅の廣い道と突當ると新規に出来たか寺でドン」太鼓と叩いて居るのら直に分るよ七「大きお有難う俺も當地へ来て法蓮寺に居あければ成らねエ」だ面白い話がある 武「堅氣に成らなくツちやア往けねエよ七」何おと云つて居やアがる最う少し有れば遣るが此金で負て置いて呉れ大きに有難う、と又も暫らく歩行き七「成程来て見れば譯アねエ境内に茶屋が出来やアがつて大層多勢人が居る」講中が有るのの知ら玄關は何處だウ、彼處のへエお頼ウ申

しますく 番僧「ドレ、那方あら七へエ法蓮寺さまは此方で番僧ハ
 イ當院です七和尚さまの日なんどのエ一日道さんは在つしやいます
 か谷中の延命院の柳善さんらのお手紙と持て参りましたが何卒之
 れとお進なすつて下さいまし番僧「ハア左様か少し待てお在なされ日
 「ハア何柳善の處のの手紙とドレ見せる何んな野郎だ、と言乍ら手紙
 と抜き讀下し日「待てるる玄關にム一珍らしい奴が來たナ彼品とチヨ
 イと持て來て見せるヨシく今片附けなければならンが湯灌場の方
 へやつて置けモウ宜いあら此方へ通せ番僧「お前さん此方へ七御免あ
 さい、と案内に連れられて突當りの八疊の座敷は和尚の居間法事で
 も有たる法衣は衣紋竹に懸り脇の床の間お道具や何の飾つて有り
 年輩五十二三で、舊時は天下の御直參赤城今井谷お居た大道寺善右
 衛門目下は出家に成て日道と云ふ七其の後は大きお御無沙汰と致し



延平

ました何日もお變りも無く日貴様も大層立派に成た久しく會な
まア隠れて居る寺に居れば間違ひねエ其の代り少し喰物は不味が夫
丈忍耐しる尤も十五町ばかり行くと酒と飲む處は有るが無闇お出
て居る七「往生が一人有たてへますが婦人でする男でその日「老婆よ七
「エ、老婆、何處のもので日「彼は那方の送鑑だッけナ番僧「三田の送鑑
で谷中の割印で日「三田の方から来たなら芝の者だ七「然うでする最
やツちまひました日「今やつちまツた七「一寸見せてお呉んなさいナ
日「遠て、見るには及ばんまア緩くり遊んで居る何にしろ今日は休ん
だら宜らう草臥れたらう今皆ナ近附きとさせるト一人く「に呼
で見せると頭こそ丸くして居ますが皆往時一緒にござるツちやら爲合
つた仲間もあるオ、七の「ア能く来たナ斯うだよア、だよと本堂の縁

の下まで見せて此處と開けると卵塔場へ出られる此處と抜けると湯
 灌場の方へ行れると色々話の内に日が暮々に成ました時酒が始ま
 り一盃機嫌で皆ゴロリく寝る七之助も自分の一ト間と貰ひまして
 小座敷に這入り横に成たが心配で何うしても眠られませぬら密と
 寢床のら抜て兩方の座敷の容子と窺て居ると全く四邊はスークと
 云ふ扉の聲七之助は占めたりと身仕度と成し手燭と點けて先刻教は
 つた本堂の縁の下より湯灌場へ行て見ると是より燒場へ下る早桶に
 白布が掛つて居るより早桶の蓋と取ると七十餘に成る婆さんが餘程
 苦しうたど見えて無けなしの齒で唇と咬んだ儘ガツクリと死んで
 居まゝ七阿母ア情けねへ姿も成たなア勘忍して呉ねへよア、一此
 ンな事に成たのは些とも知らなかつた吾儕も江戸が忙がしく成て江
 戸にも居られねへしお前の意見も度を聴いたがヒヤタケの入て有る

此の身体毒と喰へば皿までの臂の通り一ト稼ぎと思つたが夫にして
 もお前に小遣でもやらうと思つて往て見ると家がハツマリ締つて居
 るより家主で段々容子と聴けば吾儕のやうな無頼の悪兒でも子と思
 ふにして十兩といふ金と小遣に呉て細いな遺書と置つたのを見て
 驚ろいた吾儕が最う少し早く眞人間に成たらお前も此ンな了簡には
 成るまいものと吾儕が手と下さんでも吾儕がお前と殺したやうなも
 の誠お濟まゝいが吾儕も晩のれ早のれ御年貢は上る身体だのら行掛
 の駄賃にお前と殺した奴等は悉皆敵と討てやるのら何うの成佛で呉
 れ南無妙法蓮華經、、、、、ト題目と七八遍となへ人の來ない
 内にト棺の蓋として密と卵塔場より塔婆垣と越へてソロリと這出さ
 うととる鼻ッ先へソツリと突立た者が有る七フホー誰だ武助の驚
 愕りした武汝何處へ行く七宵酒と御馳走に成たが慣れ無へてへも

のは往けぬへものな何うしても眠る事が出来ず先刻聞いたにや是の
 ら十四五丁行くと酒屋が有るてへら未だ夜も更けぬへら其處へ
 行く積りだ武嘘と吐け野郎七何おも嘘と吐きアしねへ武其ならば
 門のら當り前に出る何んだッて塔婆垣と破る然う云ふ事も有らうと
 思つて茲に立て居た七「オヤ此ノ畜生汝腰が立たねへと云ふじやアね
 エの武腰が立たねエと云ふのは嘘だ鼻の欠たのは本當だ何うも容子
 が變だと思つたのらグル〜巡視て居たが湯灌場に火灯が見えて汝
 メツ〜泣て居やアがつたらう七馬鹿ア云へ泣きなんぞするもん
 と捕へし手先と振放さうと思ひましたが武助は糞力の有る奴で中々
 放さん七之助は無理お振り拵さうとする途端に脛が武助の脾腹お
 當りウーンと尻餅と搦いて倒れると見向きもせず江戸へ取返し脇
 坂淡路守さまへ駈込み訴訟に及びました是に於て淡路守様は翌日登

城の上御月番の老中へ斯々箇様と仰せ上られ八州へ御下知おなりま
 した名にしかふ一々寺と擧て召捕る理由で容易な捕物ではござり
 ませんゝら夫ゝら夫と通達と致し八州多人數で乗込み悪人原と悉く
 御召捕に相成り一應下調べに及ぶと彼の延命院の柳善も同類といふ
 事が分り八州ゝら脇坂様へ御内告になり蓮華往生の連中は御寺様丈
 けお軍鶏駕の珠數繫ぎで江戸表へ御差立ありました是より前に脇
 坂様は延命院の舉動と怪しいと目と着られ公用人笹川何某の娘と玉
 お遣ひ其娘より座敷の普請其他怪しい事の證據と擧させ遂に是も御
 下知物で御召捕になり日本橋へ三日晒の刑になりました裁判の摸様
 杯も咄し屋の方では不可ませんゝら是等で結局に致しませう

菊摸様延命袋終

明治廿五年十二月十九日印刷
明治廿五年十二月廿一日出版

發行者

辻岡文助
東京市日本橋區
横山町三丁目貳番地

印刷者

松本秋齋
東京市本鄉區湯島
壹丁目十三番地



發兌元

金松堂
東京市日本橋區
横山町三丁目貳番地

